
Dark Blood dream

亜優紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dark Blood dream

【Nコード】

N7242L

【作者名】

亜優紀

【あらすじ】

風野みちるは22歳を迎えたばかりの風野家長女。風野家の女に代々受け継がれる「能力」にはみちるはまだ目覚めていなかった。能力に目覚めている（？）弟翔太をはじめ、家族と楽しく過ごす日々。ところがみちるには少しずつ忍び寄る闇の影が…。

みちるにはどんな能力があるのか？能力に目覚めることができるのか！？

はじまりの朝

血がいるんだ

俺には…いや、俺たちには血が必要なんだ

聖なる乙女の血が…！！！！

「おはよう」

身支度を済ませた、すっかり社会人の姿が板に付いたのは、
凧野みちる・なぎのみちると言った。

おはようと先に食卓についていた家族が口々に挨拶する。

「おばあちゃん、おはよう」

「おはよう。今日もみちるは化粧のノリがいいね」

「もう、おばあちゃんったら」

凧野家は7人で住んでいる。みちるの祖母・ユリをはじめ、母の飛鳥、父の光司、長男の勇一郎、次男の隆哉、みちる、三男の翔太という構成だ。

つまり、みちるは4人兄弟のうちで3番目の子となる。兄が上に2人、弟が1人。

父と勇一郎はすでに朝食を食べ終わっていて、食後のお茶をすすりながら新聞やテレビを見ている。隆哉とユリは先ほど食べ始めたようだった。

「さあ、私たちも食べましょう」

母の飛鳥がみちるのお茶碗にご飯をよそって自分の分と一緒に持つてくる。

「ありがとうございます」

桜が描かれた淡いピンクのお茶碗を受け取り、母の作った卵焼きを頬張る。甘くておいしい。

「翔太はまた遅刻するんじゃないのか」

父の光司が新聞を読みながら不機嫌そうに言う。

「ほっとけよ。甘やかすとロクなことないぜ」

いつの間にか朝食を食べ終わった隆哉が自分の手鏡で髪を整えながら言う。

「タカ兄に言われたくないわよ。髪の毛は洗面所でセットしてって何回も言ってるじゃない」

「うるせえな、みちるは。誰に似たんだか」

ぶつぶつ言いながら185センチある長身を昔からの日本家屋独特の低い鴨居をぬつとくぐって洗面所に向かう。すると、縁側でどたと音がした。

「痛っ。急に現れるなよ！タカ兄は」

「お前がギリギリまで寝てるから慌てんだろ」

いつもの兄弟喧嘩が始まった。お互いに悪態をつきながら隆哉は洗面所へ、翔太は食卓へ現れた。

「お前何時間寝たら済むんだよ」

呆れた顔で勇一郎が翔太を頭のとっぺんからつま先まで眺めた。翔太は今時の高校生といった感じで、ネクタイはゆるめて、ズボンには腰で履き、シャツは腰からはみ出ている。髪は明るい茶色だし、両耳にピアスをつけている。飛鳥はため息をつき、

「お母さんまた学校に呼ばれるの嫌だからね」

「とりえは明るくて挨拶がよくできるぐらいだな」

父が新聞越しにちらっと見る。

「基本だろ。それ」

いただきますも言わずに出されたご飯に生卵と醤油をかけて、かきこむ。

「まあ、やりたい放題できるのも今のうちだからな」

勇一郎が時計を見ながら立ち上がる。行ってきます、と玄関へ向かう。また家族が口々にいつてらっしゃいと答える。

「私もそろそろ行かなきゃ。ごちそうさま」

みちるが立ち上がる。小走りに洗面所へ向かうと、まだ隆哉が髪の毛をいじっている。

「ハミガキさせてよ。もう気になるなら坊主にしたらいじゃない」「俺みたいな看板男は見た目が大事なのだ」

隆哉はみちるの一つ上の23歳。みちるの勤めている会社の近くでカフェの店員として働いている。

「気楽でいいわね。もう」

さつさとハミガキを済ませて、みちるは玄関へ向かった。

「行ってきます!」

またみんながいつてらっしゃいと答える。

「みちる」

祖母のユリがみちるを呼びとめる。

「なあに、おばあちゃん」

「石は持ったかい」

「もちろん」

みちるの首にかかった少し長めのペンダントを持ち上げて、みちるはウインクして答えた。持ち上げたペンダントはラベンダー色のカクトソーの胸元に吸い込まれた。

みちるが地下鉄の駅へ向かっていると、後ろから足音がする。振り向くと弟の翔太だった。

「学校、間に合うの?」

「1時限目自習だった。友達からメールがきた。ゆっくり行くよ」「だめよ。急ぎなさい」

「てゆうかさ、みちるちゃん最近『つかれてる』よ」

翔太は「みちるちゃん」と呼んでくる。

「どうしてよ。お肌だつてこの通りプリプリしてるし…」

「違うよ。『憑かれてる』の」

「なによそれ…。朝からやめてちょうだい」

ちよつと膨れてみせるみちる。

「だからあえてばあちゃんは石持つてるか聞いてきたんじゃないのかよ」

「そうね。そう言われると、あえて聞かれたような…」

「なんでそういうところ鈍いんだよ。凧野家の女なのにな」

凧野家には代々、女にだけ受け継がれる能力がある。祖母のユリは霊感とでもいうのか、直感力や、予知能力に長けていて、朝出かける家族に何か予兆があると必ず声をかけてくるのだ。母の飛鳥はみちる達を産んでからはそういう能力がすっかり弱まってしまったのだが、未だに治癒能力だけは健在で、家族が少し怪我をしたくらいだったら母の力で治してしまっている。

当のみちるはというと、まったく現在まで何の力があるかわかっていなかった。

「変な霊感なんてあるだけ面倒よ。なんであなたは男の子なのに霊感があるのかしらね」

「突然変異だよ。きつと。これからはうちも男の時代だぜ」

翔太は凧野家史上初の能力があると思われる男なのだ。感じ取るだけでなく、悪霊を封じたと翔太は武勇伝をよく語ってくる。

「この石、翔太にあげようか」

「ダメだよ。何かあった時が困るだろ。俺にはコレがあるからね」といって、制服のポケットからマイお札を取り出す。

「本当に大丈夫なの？それ」

思いつきり疑うみちる。

「だつてこれ、屋根裏からたくさん未使用で出てきたんだぜ。ばあちゃんも使つても大丈夫つて言つてた。高校のトイレの霊だつて封

じたしね」

「それを使いこなせるのがすごいわよ」と、ここで地下鉄の駅に着く。

「じゃあ、急いで学校行くのよ」

「みちるちゃんもその”変なの”に気をつけて！」

大きく手を振ってチャラチャラした弟は高校へと向かった。弟の後姿を見送って、あれで高校3年生って大丈夫かしら、とみちるは頭を抱えた。

動き出した闇

みちるは地下鉄のガラスに映る自分を眺めながら考えていた。

確かにここ最近、いやもう2年になる。変だった。でも、気のせいかもしれないし、自分が働き出して環境が変わったから、《そう》なのかも。

実は前日はみちるの22歳の誕生日だった。20歳には、母から風野家に代々伝わる石を受け継いでからそれは始まったような気がする。

いつもそれは夢の中だった。自分に助けを求める声が微かに聞こえた。聞こえたような気がしたというのが正しい表現だったのかもしれない。しかし、それはいつしかはつきり聞こえてくるようになったのだ。

最初は幼い子供が助けを求める声だったそれが、回数を重ねるごとにどんどんその助けを求める人物の声が成長しているのだ。実はその夢は昨夜も見ていて、声を聞くだけでは自分とそう歳が変わらないような感じだった。

みちるは少しずつ気づいていたのだが、この夢は新月の時に限って見る。やっぱりおばあちゃんに正直に話した方がいいのかしら、みちるが黙々と考えていると、突然肩を誰かがつついた。驚いて振り返ると、そこには爽やかな笑顔を連れた男がいた。漫画みたいな爽やかさだ。

「おはよう」

「おはようございます」

「風野さんじゃないかなと思ったんだ。なんか考え事してた風だったから声かけようか迷ったんだ」

「あ、いえ。ボーっとしていただけです」

みちるが照れて顔を赤くして俯く。この場面を風野家の兄弟が見たらそろって「ありえない！」と言うだろう。それくらいみちるはか

わいらしく振舞っていた。みちるに話しかけてきたのは、みちるの5歳年上で（ちなみに長男の勇一郎と同じ歳）氷室といった。社内では女性社員の視線を独り占めするくらいにいわゆるイケメン男子だ。確かにかっこいいけど、この人にはどこか名前の通り、氷のよくな冷たさが漂うところがあるわ、とみちるは思うことがある。

「ペンダント、服に隠れちゃってるよ」

氷室がみちるのペンダントに触れようとしたその時、触ろうとしてペンダントから手を咄嗟に離れた。氷室が少し顔をしかめた。

「静電気ですか。ごめんなさい」

「大丈夫だよ…。まだまだ乾燥しているもんね」

「これ、お守りなんです。あんまり人に見せるもんじゃないっておばあちゃんに言われていて…」

「お守りだったら大事にした方がいいよ」

氷室はいつもの笑顔に戻っていた。

会社に到着すると、なんだか騒然としていた。

課長や部長が深刻な顔をして集まって話をしたり、まだ営業時間前というのに電話がひっきりなしにかかってきて、皆が対応に追われている。

とりあえず手が空いている同僚に声をかける。

「おはよう。どうしたの、この騒ぎ」

「おはよう、みちる。大変なのよ」

「どうしたの」

「それがね…」

同僚が耳打ちで事態を教えてくれた。えっとみちるが驚いた声を出す。

「大変ね…」

眉間にしわを寄せてみちるも深刻な顔をした。この騒ぎは、おとといから連絡がついていない女性社員にとうとう搜索願が出たもので、情報を嗅ぎつけるのが早いマスコミからの取材の電話ということで、

朝から電話が鳴っていたのだ。しかし、それだけではなく、この1カ月でみちるくらいの年齢の女性が謎の行方不明になっていたのだ。

「怖いわね…みんな犯人は同じなのかな」
同僚がつぶやく。

「今宴会シーズンだから遅い時間に帰るその途中で…ってところなのかしらね」

「でもみちるは大丈夫よね。後ろから襲われても、どんな大男でも投げちゃうでしょ」

「私だって急に襲われたらどうにもならないわよ」

頬を膨らませてみちるが抗議をする。みちるは合気道3段なのだから頬を膨らませたところで、指摘された内容に否定しにくいところがあるのだが…。

そんな騒ぎを横目に仕事をしつつも、電話を取ると、マスコミからの取材だったりもした。そんな電話は全部課長にまわっていた。

夕方になると急に空が暗くなり、みるみるうちに雨が降り出した。

「雨が降るなんて聞いてないわ!」

窓の外を見た女性社員たちが口々に悲鳴をあげている。確かに今日は1日晴れると天気予報では言っていた。今頃母は慌てて洗濯物を取り込んでいるに違いない、とみちるは母の姿を思い起こしていた。

「そうだ、自分の心配もしなくちゃ」

ふと、みちるは普段誰も入らない倉庫に置き傘をしていたのを思い出した。退社時には不届き者が置き傘を勝手に使っていることがあるので、盗られてしまう前に自分の傘を確保しておこうと、席を立った。

冬ならこの倉庫はロッカーにもなるので、なんとなくひと気があるものなのだが、厚手のコートが不要になってきた4月の中旬にもなると、必要な備品を取りに来る以外は誰も来ない。みちるがドアノブに手をかけたその時。

「…？」

誰かに呼ばれたようなそんな気がした。なんか深い底から響いたように、そんな微かな声が聞こえたような。

「誰か中にいるのかな」

独り言を言いながらドアを開けようとする

「凧野さん！」

誰かがみちるを呼びとめた。

無力

みちるを呼びとめたのは眼鏡をかけた、髪の毛はわからない程度にセツトされた男性　まだ男の子といったほづがしっくりくる　だった。

「山田君」

「あの、急ぎの電話が入っていますけど」

「あら、どちらから」

「×商事です」

そこはみちるが主に取引の営業をしている会社だが、最近先方のみちるを担当してくれている営業の女性がずっと休んでいるというこ
とで、仕事が滞っていた。

「わかったわ。すぐ出る」

電話に出ると、先方の係長という気の弱そうな男性からで、みちるとどこまで仕事の話が進んでいたか教えてほしいということと、それを踏まえた上で、営業の担当が変わるということだった。

「あの、営業の伊藤さんは…」

みちるが遠慮がちに聞くと

「ほら、あの、最近若い女性が行方不明になってるじゃないですか
…あの一連のものかわからないんですけどね、伊藤も行方がわからなくなっているんですよ」

その係長はまるで事件には係わりたくないかのようになり、もともと小声だった声のトーンをさらに落として話した。

「まあ、そうだったんですか」

一通り話をして、また詳しいことは先方がみちるの会社に来て打ち合わせるということで話が終わった。なんだか気持ち悪いわね　率直なみちるの感想だった。

夕方から雨が突然降り出して、悲鳴をあげているのがみちるの近く

にもう一人いた。隆哉だ。

「ああ、ちくしょう。午前中からのペースだったら今日の売り上げは今年最高になるかと思っただのになあ。人生そううまくいかねえか」
正社員ではないが、大学からずっと続けて働いているということ、アルバイトながらも特別待遇としてくれている。隆哉はぼやきながらオーブンカフェスペースに雨が降りこまないように、開け放していたガラス戸をすべて閉めた。少しかがむとみちるのオフィスが入っている高層ビルが見える。

俺だって真剣に働いているんだけどな、今朝みちるからのんき呼ばわりされていたのでなんとなく腹の中で思った。すると、新たな客が入ってきたようだ。

「いらっしやいませ…ってなんだ遅刻野郎か」

「野郎とは乱暴だな。おれはまだピチピチの高校生だよ」

隆哉のもとに来たのは翔太だった。少し雨に降られて濡れている。

「ちよつと待つてる」

そう言っつて隆哉が奥に引つ込むと、タオルを翔太に渡した。

「タカ兄サンキュー。ついでにマンゴージュースももらえたらうれしいな」

「ほらよ」

もうわかっていたと言わんばかりに隆哉は翔太にジュースを渡す。

「暇そうね？」

「この雨じゃあな。誰も来ないよ。こっちまで来るなんてめずらしいな」

「ちよつと気になつてね。あの箱入り娘が」

「みちるか？また靈感かよ」

「今回はやばいんだよ。今まではみちるちゃんが気づかないうちに俺が追っ払ってただけだよ」

「俺にはそちらの世界はわからないわ」

隆哉は全くなにも感じないのである。だから肝試しと行って心霊スポットなどに行っても怖くもないし、なにか連れて帰ってくるとい

うこともない。逆にそれは完全シャットアウトという能力なのかも
しれない。

「今までののは軽かったんだけど、今回は凶悪で、根が深いんだよ。
そんな感じ」

「へえ。それがみちるに噛みつくかなんかしたらどうなるんだよ」

「それは俺にもわかんない。でも取り返しがつかなくなるかも」

「おいおい。冗談でもやめろよ。気持ち悪いな」

そう隆哉が言い切る前に突然雷鳴が鳴り響いた。ものすごい稲光の
後に、2人がいる店内は真っ暗になった。

「くそつ。停電か」

隆哉が懐中電灯を取り出して店内を照らすと、翔太はみちるが働い
ているであろうビルを見るために、ガラス戸にへばりついていてい

街中が停電してしまつたようで、真っ暗だ。夕闇のほんのわずかな
明かりを頼りにして歩くしかなさそうだった。

「翔太、どうした」

「みちるちゃんがやばいかも」

そう叫ぶと傘もささずに翔太はみちるの働く高層ビルへ走っていた。

街中が停電する少し前に時間を遡ると、みちるはすっかりさっきの
電話の件で、置き傘のことを忘れていた。

「あ、そうそう。忘れないうちに……」

主婦みたいな独り言を言いながらまた倉庫へ向かう。冷たく銀色に
光るドアノブを回して倉庫の電気を点ける。もうさっきの声のこ
とは忘れていた。倉庫は雑然としていて、冬にロッカーとして機能し
ている場所を通り抜けたところに傘を置いている。薄い紫の傘が見
えた。あつたわ、と安心して傘を手に取りろうとした時。誰かがみち
るの肩を掴んで無理やり振り向かせた。本当に突然には対応できな
いわ、と今朝の同僚と話したことを思い出したところで、空に稲妻
が走り、街が闇に沈んだ。

みちるが覚えているのは、強烈な稲光までで誰がみちるの肩を掴ん

だかはわからずじまいだった。

気づけば、病院のベッドにみちるは寝ていて、誰かが私の顔を覗き込んでいる。誰だっけ。見たことある。思い出した。

「翔太…?」

「みちるちゃん!気づいた?」

翔太の横にはもう一人いた。

「倉庫で倒れていたんだよ。びっくりした」

「氷室さん…」

みちるの顔が少し赤くなつた気がした。もしかして気があるのか、と翔太は直感で思った。

「氷室さんともかく、翔太はなんているの」

「俺はみちるちゃんが心配だったから、学校終わってタカ兄のところで時間潰してたの。そしたら雷が光つて、みちるちゃんがいるところだけ真っ黒になつたからやばいと思って」

翔太は立て板に水を流すとはまさにこのこと、といった感じで一気に話した。話を横で聞いていた氷室はポカンとしている。そんな氷室に気付いたみちるは

「なにわけわかんないこと言ってるのよ。この子は…すみません。

オカルトおたくなんです、この子」

「お姉さん思いなんだね。関心するよ」

「いやあ、それほどでも」

褒められた犬よろしく、しっぽを振るように喜ぶ翔太なのであった。そう笑いながらも翔太には色々とひっかかることがあった。翔太がみちるの会社へ駆けつけた時はまだ停電中で、さすがの翔太も携帯電話の明かりを頼りに、みちるの気配がする倉庫までたどり着いたのだが、鍵がかかっていたのかドアが開かなかった。翔太が苦戦していると、突然眼鏡をかけた少年が現れてまるで、何事もなかったかのようにドアノブを回して開けた。翔太はあんぐりと口を開けたまま眺めていたが、電気が普及したので、倉庫に入ってみると、倒れていたみちると、みちるに声をかける氷室がいた、という流れだ

った。

翔太の率直な感想としては、ドアは凍りついているように冷たく、何かの封印ではないか？ということと、いとも簡単に開けてしまった少年が…気に食わなかった。別に自慢げにするわけでもなく、ひょうひょうと対応していたのがなんだか悔しかった。

「あいつなんなんだ、一体」

つい独り言が出てしまった。

「変なこと言っていないでご飯食べてしまいなさい」

飛鳥に怒られて我に返る。

「あ、うん」

慌ててご飯をかきこんで、自分の茶碗を流しに持っていく。

「みちるちゃん…」

みちるが家族の茶碗を洗っていた。

「ほら、お茶碗そこに置いて」

「休んでろよ」

「だって何ともないんだもん。会社まで早退させてもらって申し訳

ないわ」

「あ」

翔太がなにかに気付いた。

「え？」

「首に傷がついてる…」

傷は首に対して縦についていた。

「やだ…いつの間にかひつかいてたのかしら」

「今日倒れた時についたのかな」

翔太も気づかなかったが、それはペンダントのチェーンにもついていた、いや、ペンダントを狙ったの傷だった。

「私…守られてばかりで嫌になっちゃう」

みちるがぼつりとつぶやいた。

疑惑（前書き）

ちよつと改定したり、書き足したりしてます。

疑惑

翔太は悶々としていた。

みちるに聞くと、あのドアを開けた人物は山田といった。会社ではみちるの1年後輩だという。

「あいつが怪しいかも…」

ひとり自室で今日の出来事を考えていた。みちるは病院では軽い貧血だろうということとで診断を受け、会社は早退した。みちるの首の傷も気になる。もしも、翔太が感じている、みちるに憑いている”何か”がみちるを本格的に狙っているのなら、風野家代々の石がまずは邪魔になるはずだ。

「ということとは…！」

突然ベッドから跳ね起きて、部屋を飛び出たところで勇一郎とぶつかりそうになった。

「おい！最近落ち着きないぞ」

「勇兄ちゃんごめんごめん」

ドタドタと食卓へ翔太がやって来る。

「ちよつと！走らないの」

飛鳥に咎められる。でもそれはよそに

「みちるちゃんは？」

「みちるなら勇一郎のあとにお風呂行ったわよ」

お風呂へ向かってまた走る翔太。

「翔太！あんた投げ飛ばされるわよ！」

そんな母の忠告も耳に入っていないのか、風呂へ急ぐ。

「みちるちゃん！」

勢いよく脱衣所の引き戸を開ける。

「きゃっ！」

みちるはタンクトップを脱ごうとしていた。白く引き締まった腹筋があらわになっている。

「うわっ…ごめ…」

その後、弾けた音が家じゅうに響いたのは言うまでもない。

「だからあんた忠告したでしょう」

氷でくつきりと手の形がついた左の頬を冷やししながら、母の呆れた声を受け流す翔太。テレビを見ながらみちるがお風呂からあがるのを待っていた。祖母のユリはそんな状況がおかしいのかニコニコしている。そこへみちるがお風呂からあがってきた。

「もう。そんなに慌てる用事だったの？」

「だって俺気付いたんだよ…」

「何を？」

「さっきの首の傷をもう一回見せて欲しいんだけど」

「これね」

そう言っつて右の首筋をゆるいウェーブのかかった黒髪をかき上げて翔太の方向へ差し出す。

まじまじと見て、

「やっぱり」

「なんなのよ」

「母さん、わかる？これ」

「ただの傷じゃないの。さっきも言っただのでしょ」

「よくよく見たら、途中で途切れてるんだよ。で、またここから傷が続いてる」

「あら、本当ね」

2人がジロジロと首筋を見るので、いい加減首が疲れた。

「1回休憩していいかな…」

「そりゃかまいたちかもしれないね」

今まで黙っていたユリが口を開いた。

「え？かまいたちつて東北の妖怪だろ？」

翔太が素っ頓狂な声を出す。

「意外とすぐそばにいるもんだよ」

「へえ。じゃあそいつがみちるちゃんを狙ったために、まずは石を狙ったってことかな」

「そう考えるのが自然だね」

「おばあちゃん、どうしよう。ペンダントが切れちゃったら…」

「満月の日を待つしかないね」

「「満月?」」

みちると翔太と飛鳥が揃って聞いた。

「飛鳥の時は何にもなかったからあなたには教えていなかったけどね、今度の満月の日に裏山の井戸水を汲んで、石を井戸水に浸して一晩満月の月光にさらすんだね。最後にお清めをしたのが飛鳥が生まれた頃だから…」

「ウン十年前か!」

「うるさい」

お盆で頭を叩かれる翔太…。

「でも裏山だったら男の俺は入れないから、みちるちゃんに何かあった時が困るよ。体から石を外すわけだろ」

「そうねえ…体の結界を外すようなものだものね」

飛鳥は左手を頬に当てて考えこむ。

「晴れていれば月は道を照らしてくれるさ。光が当たるところに闇はないからね」

「じゃあ、今度の満月が晴れたったら…」

「お清めをするんだ。でも晴れていないと意味はないし、なにかに付きまとわれているのなら、この家から出ない方がいいね」

「わかったわ」

みちるは力強くうなづいた。

翌日。会社に行くときみんなが心配してくれた。一通り礼を述べたあとは、昨日途中で帰った分を取り戻すために仕事へ集中した。氷室も心配して声をかけてくれた。

「昨日は大丈夫だった?」

「はい。弟も一緒について帰ってくれましたし」

ニッコリと笑顔で答える。

「あ…首」

氷室が首の傷に気付いて遠慮がちに言った。

「これ、弟が教えてくれたんですけど、昨日倒れた時に傷がついちやっただけみたいで」

「女の子の肌はデリケートだからなあ」

みちるはなんとなく氷室の左手を見ると、中指と人差し指の先にカツトバンを貼っていた。

「指…怪我したんですか」

「ああ、昨日模様替えしていたら指の上に物が落ちてきてね。爪が割れちゃったんだ」

痛そうに説明する。

「そうだったんですね」

みちるも合わせて痛そうに片目をつぶる。平日に模様替えなんて小まめな人なんだなとみちるは関心した。なんだかわけのわからない霊だの何だのとの関係のない氷室と話をしていると落ち着くとみちるは思った。

お昼の休憩から帰ってきて、仕事を始めようと机の上の書類に目を通していると、山田が会議の資料を配っていた。資料を配る右手には痛々しい包帯が巻かれていた。なんだか怪我人が多いわね、とみちるは思った。山田より資料を受け取って

「右手、どうしたの？」

「これアイロンで火傷しちゃったんです。僕ひとり暮らしなもんで」

「そうだったの。ちゃんと冷やした？」

「冷やしました。アロエも塗りました」

「ひとり暮らしの家にアロエがあるの!？」

「ばあちゃんが持って行けってうるさかったんで持ってきたんですけど。まさか役に立つとは思いませんでした」

頭を掻いて苦笑いしながら山田が答えた。

「うちの庭にもアロエがたくさんあるから、なくなったら言ってね」

「そんなに何回も火傷したくないですよ」

それもそうね、とクスクス笑いながらみちるは答えた。

今日は何事もなく、仕事を終えて帰路についた。

「ただいま」

「おかえり」

ちょうど勇一郎が玄関で自分の革靴に手入れをしていた。

「勇兄ちゃん革靴が好きね」

「ああ。革靴があれば俺は女はいらん」

「もう、勘違いされるから…」

みちるは苦笑いしながら、食卓に一旦顔を出してから自室に引き上げて楽な格好に着替える。改めて母から受け継いだ、風野家代々の石を眺める。ペンダントにしては長めで、服の中に入れると、ちょうど胸の谷間の入り口（！？）あたりに下がる。石は親指の第一関節くらいの大きさで、深い緋色 ガーネット色といったほうが馴染みあるだろうか をしている。きれいな色をしているが、見方によつては血の色にも見える。形は宝石の方に形成はしておらず、天然石を枠にはめて枠にチェーンを通してしている形だ。

「この石がね…そんなに欲しいならあげるのに」

まだみちるは能力にも目覚めていないので、石の継承者としての自覚にも欠けていた。

家に帰ってからはいつものように、隆哉と翔太のおかず争いもあり、チャンネル争いもありで、何気なく時間が過ぎていった。

「それじゃ、おやすみなさい」

両親と祖母にあいさつをして、自室に引き上げる。最近色々ありすぎて気を張り詰めていたのか、一気に眠気が襲ってくる。

「もう寝よう」

1日くらいストレッチもさぼってもいいよね、そう自分に言い聞かせながら布団にもぐり、みちるの意識は急降下するよつに眠りに落ちていった。

接触

体が重い。髪の毛の一本一本から、足のつま先まで、拘束されているかのように体が動かせない。金縛りだろうか。

「っ…！」

声すらも出せない。思い切って目を開けてみる。だが、真っ暗なのか何も見えない。

みちるは恐れてはいなかった。自分はさっきまで自分の部屋で寝たはずだから、これは夢なのだろう。

でも…あまりにもこれは夢にしてはリアルな感覚だ。ここは暗くて冷たくて寂しい場所だ。

思い出したように体をまた動かしてみる。腕が動く。足も試したら、ひざを曲げられるようになった。それから少し時間はかかったが、体が動くようになった。上体を起こして辺りを伺ってみる。暗闇にも目が慣れてきて、広い部屋に自分はあるようだ。少し頭が重い。立てひざに頭を預けて目を瞑る。こうしたらいつもの朝になるだろう。

…

「やっぱり夢じゃない」

目を開けてため息をつく。一体ここはどこなのだろう。そこでみちるはあることに気付いた。

「石は…!？」

能力がなくてもいつもお守りのように首からぶら下げていた緋色の石がいつの間にか自分の首からなくなっていた。慌てて手探りで自分の周りを探る。こつん、と当たるものがあつた。触ってみると馴染みのある角の取れた石の感触。

「よかつた…」

胸の前で両手でぎゅっと握りしめる。ここにも何も始まらない。動き回るのは本当は危ないのかもしれないが、少し歩いてみよう。そう思い、石を首にかけようとした。

「チェーンが…切れてる…」
自分を守ってくれる結界が切れている。きっとこれは悪い夢なのだ。そうみちるは思うようにした。

石をなくさないように、左手をチェーンでぐるぐると巻き、石を手のひらで強く握りしめた。

歩き始めて初めて気がついたのは、自分が着なれないロングドレスを着ていることだった。

「なにこれ？」

まるでおとぎ話に出てくるお姫様みたいにドレスを引きずりながら歩く。暗くて自分がどんな格好をしているのか全くわからないが、感覚では細身のタイトなロングドレスで、キャミソールタイプ。素材はシフォンか何かだ。足には何も履いていなかった。裸足でひたひたと歩く。視界は明瞭ではないので、壁をつたってゆっくり進む闇雲に進んでいると、先に弱いが青白い光が見えてきた。

「誰かいるのかな…」

とりあえず光に向かって歩く。

ここまで歩いてきて感じ取れたのは、建物なのは確かだが、窓がなければ明かりが点くようなものもない。そして、この異常なまでの静寂。誰もいない、というよりはこの空間は時が止まっているような感じだ。自分がはき出す息でさえ、この空間に触れた瞬間には死んで固まってしまおうようだ。

段々と光が大きくなってきた。でも相変わらず弱々しい。この光の正体はなんなのだろう。そう考えていると自分の息が上がっているのに気付いた。慣れない場所を気を張り詰めて歩き続けたせいだろうか。

「なんだか…苦しい…」

でももう少しであの光にたどり着く。しっかりしなくちゃ。近づいていくと、光で自分が廊下を歩いているのがわかった。廊下の先に大きく開けた部屋があり、天井も急に高くなっている。

「これは…」

見上げるほどある大きな砂時計。これが光の正体だった。全体が青白く淡く光っている。ただ、この砂時計は壊れていた。みちるが屈んで見ると、手のひらほどの穴が空いていて、そこから砂がこぼれている。砂はキラキラと光っていて、両手ですくってみると氷のように冷たくてびっくりした。

「本当に砂…？ここは一体どこなの？」

片手に砂を持ったまま、立ち上がると砂時計の向こうに扉が見える。扉に近づき、開けようと試みたが、鍵がかかっているのか開かない。そして扉は凍てついたような冷たさをしていた。

「ここは冷たいづくしね」

諦めて振り返ると、急に目まいがしてひざを床につく。

「急に何…？」

また息も苦しくなる。もう、ひざもついていられない苦しさで、肩で息をつきながら床に倒れこんだ。頭の中で誰かがみちるを呼ぶ。

「誰…？」

意識がどんどん遠のいていく。みちるはもう一度砂時計を見たが、もう次の瞬間には意識を失っていた。

みちる

誰かが私を呼んでいる。聞きなれた声。体も温かい。そうか、私さつき倒れたんだっけ。ここはどこなんだろう。私死んじゃったのかな。

みちるちゃん

この呼び方は翔太かな…くすぐりたい、誰かが私のほっぺたをくすぐってる…まだくすぐってる。もう、ふざけないで…。え、だんだ

んひどくなつてきてない？くすぐったいっていうか、痛くなつてきた。痛い、ちよつと本当にやめて。痛いってば！

「痛い！」

みちるはそう叫んでガバつと布団から飛び起きた。

「うわっ」

みちるの勢いに驚いて翔太が尻もちをつく。みちるのベッドのそばには、勇一郎と翔太がいた。

「あれ…どうしたの」

「お前、なんともないのか」

勇一郎が相変わらず冷静に聞く。みちるの脈を取る。

「体は異常なしだな」

勇一郎は医者卵なのだ。

「まだ5時？」

みちるが時計を見て驚く。さきほどの変な夢を見たせいだろうか。汗を大量にかいている。自分を落ち着かせて、自分の部屋を見回す。なにも変わらない、いつもの自分の部屋だった。

「みちるちゃん、さっきまで死んだのかと思つてびっくりしたんだよ」

「こいつ、みちるを揺さぶったり、ほっぺた叩いたりしてひとりで大騒ぎだよ」

「そうだったの…」

「冗談じゃなくて、ほんとうに氷みたいに体が冷たかったよ」

翔太は柄にもなく、真顔で言った。

「どうしたんだろう、私…」

やっぱりあの夢が関係しているんだろうか、考え込む。みちるは石のことを思い出した。

「あっ、石！」

胸に手をやると、石がない。ひとりでおろおろしていると、

「ど、どうした」

勇一郎が急に挙動不審になつたみちるを心配する。

「いつもの石が無いの」

「なに言つてんだよ。手に持つてるじゃん」

翔太が呆れて言う。

「あら」

そう言つて左手を眺める。左手は夢の中と同じようにチェーンを手に巻きつけていた。砂時計のことを思い出して、右手を眺める。そこには一握りの青白い砂が握られていた。

「…夢じゃなかつたんだわ」

「その砂は？」

翔太が触つて、あわてて手を引つ込めた。

「なんだよこれ。よく触つてられるな」

「え？」

「ドライアイスみたいな…冷たすぎて凍傷になつちやうよ。早くどこかに移して」

とりあえず謎の砂を空きビンに入れる。みちるは砂を握っていた右手の平を見て悲鳴をあげた。

「きゃっ！これ…」

泣きそうな顔をして勇一郎に手のひらを見せる。

「黒ずんでる…凍傷かもな。台所に来い」

勇一郎はみちるの手を引つ張つて、台所に連れていく。翔太は後ろから心配そうについて行く。勇一郎はとりあえず応急処置をした。

「手当はしたが…凍傷じゃないかもしれなぞ」

「どういうことだよ？」

翔太が訝しげに聞く。

「私はあの砂、冷たくもなんともなかつたわ」

「症状が凍傷じゃない」

「火傷でもないのか？」

「ああ」

勇一郎がきつぱりと言い切る。今日は幸運なことに休日だ。ゆっくり

りすることにしよう。

「火傷、か……」

みちるは右手を火傷したと言っていた山田を思い出していた。

蝕まれる体

みちるの悪夢騒動のあとには、いつもと変わらない朝食風景があった。

「翔太いたの？」

それ以外は。

「俺だつてたまには早く起きるよ…」

母にむくれて答える。みちるは早朝からの騒動で疲れたのか、沈んだ顔で朝食を取る。それを心配そうに見る勇一郎。

「あら。その手どうしたの」

飛鳥がみちるの右手に気付く。

「ちよつと…火傷しちゃつて」

「朝っぱらからコーヒー沸かしてたんだ」

勇一郎が助け船を出す。

「休みだから早く起きなくてもよかつたのに」

何も知らない飛鳥は笑つて言う。

朝食が終わるとみんなはそれぞれに散つた。

父の光司は自分の事務所へ。来客があると言つていた。光司は弁護士のなのだ。

勇一郎は相変わらず靴の手入れに余念がない。隆哉はカレンダーの関係のない飲食業なので、9時半には家を出て行った。

みちると翔太はユリの部屋へ呼ばれていた。

「おばあちゃん、なあに」

「改めてどうしたんだよ」

「まあ、座りなさい」

すすめられるまま、2人は座る。

「みちる、あたしにその右手を見せてみな」

ユリにはなにも隠せないと思つたのか、右手に巻いている包帯をス

ルスルと解き、右手の平を差し出した。

「話すと長くなるんだけど…」

今朝の一連の騒ぎと勇一郎からは怪我ではないという診断がおりたことも話した。

「すごいよな。夢の世界から砂を持ってくるなんて」

翔太は関心しながらみちるの手のひらを覗き込む。

「勇一郎は冴えてるね。もともと、普通の医者だったら火傷だの凍傷だの言うだろうけども」

「どういうこと？」

「女に生まれなくても多少は感じるものがあるんじゃないのかね」

「じゃあ、俺が見えたり感じたりするの？」

「あながち嘘じゃないよ」

「おお」

翔太は少し喜んでいる。

「じゃあ、私の能力ってなんなのかしら…」

「いつかそのときが来るよ。焦りなさんな」

ユリはみちるの右手を両手で包んで言う。ユリが言うことはなんだか全て受け入れられるから不思議だ。

「でもみちる。気をつけなさい。この右手は…」

ユリが眉間に皺を寄せて言葉を切る。

「ばあちゃん、なんだよ」

翔太が次の言葉を急かす。

「誰かがあんに呪いをかけたかもしれない」

「うそ…」

「一気にかかるもんじゃない。少しずつ時間をかけて相手の体も思考も蝕んでいくのさ」

「じゃあ今朝見た夢も？」

「可能性はある。誰かがあんたの思考に入り込んできているかもしれない」

「なんだかすごい次元の話になってきたな…」

翔太も固唾を呑んで話を聞く。

「それでね、おばあちゃん。私からも話があつて。これなんだけど、緋色の石をはめている枠からいつものように金色に輝くチエーンが通されているのだが、途中で切れていた。」

「今朝翔太たちに起こされたときは手に巻いて寝てたわ。夢の中でそうしたまんなになつてたのよ。」

「ちよつと待つてな。」

ユリは立ち上がり、鏡台の引き出しからくたびれた革の袋を出してきた。中から紅い華奢な革紐が出てきた。

「ちよつと貸して。」

みちるが石を渡す。ユリはなんでもないように、チエーンを外し、石をはめ込んでいる枠に華奢な革紐を通して、最後は解けないように結びきる。

「これは井戸に捨てないといけないね。」

チエーンを和紙に包んだ。

「じゃあ、今度の満月の日に？」

「みちる自信をお清めして、それはいつもの井戸の中に投げ捨てるんだ。どんな悪い奴もあそこから這い上がった奴はいないよ。」

「というと？」

翔太は話が飲み込めていなかった。

「切られているということは、そこが入り口。チエーンを切ったと同時に相手はみちるの体にも傷をつけているはずさ。そこから呪いを仕込まれたかもしれないよ。」

「みちるちゃん、じゃあ首の傷は・・・。」

「そうね。おばあちゃん、この前私が会社を早退した日なんだけど・・・。」

あの街全体が停電で闇に包まれた日の話をした。翔太はついでに、みちるのいた倉庫が開かなかった話もした。

「気をつけるに越したことはないね。ただ、まだ誰があんたを狙っている者かもわからない。変に警戒してもこっちが気づいているこ

とになってしまっからね」

「わかったわ」

ひとしきり3人で話したあと、みちると翔太は縁側でお茶を飲んでいた。

「みちるちゃん、俺のお札貸すよ」

「いいわよ。だって私使い方わからないし」

「念じたらいいんだよ。敵を倒したいときは槍かなんかだと思って念を込めて投げつけるし」

「ふうん」

「相変わらず信じてないなあ」

「だって翔太がお札使つてるところ見たことないもん」

2人で話していると、みちるの携帯が鳴った。

「電話だわ」

「めずらしいな」

「電話くらい鳴るわよ」

立ち上がり、食卓の上においてある携帯を見る。相手は会社の同僚からだった。

「もしもし」

「みちる？今なにしてるの」

「今は家にいるわ」

「今から河川敷おいでよ。みんなでバーベキューしてるんだ」

「本当？行く行く！なんか適当に買って行くわ」

「もう始まつてるから早くおいでよ」

「わかったわ。じゃあ」

いつもの屈託のない笑顔で電話を切る。

「男？」

不仕付けに翔太が聞く。

「会社の同僚の子。今からバーベキューに行ってくるから！お母さんには私のお昼いらないうって言っておいて」

「はいはい」

慌てて支度を始めるみちる。10分もしないうちに

「いつてきまーす」

「いつてらっしゃーい」

あくびをしながら翔太は答えた後、何か思いついたかのように慌ててみちるの後を追う。

「みちるちゃん！」

「もう、なに？急いでるの」

「これ持っていけよ」

翔太はお札を差し出す。

「昼間つから必要ないってば」

「敵はなにも暗がりばかりにいるわけじゃないぞ」

2人でにらみ合ったが、翔太が一步も引きそうになかったので、渋々、それを受け取ることにした。

翔太は渋々お札を受け取った姉の後姿を見送る。

「なんにもなければいいけどな」

30分もしないうちにみちるは河川敷に着いた。気候のいい時期なのでみんな考えることは同じようで、お弁当を広げたり、バーベキューをしたりしている。

「みんなどこだろう・・・」

ビールと簡単なおつまみをコンビニで買ってきた。みんなそれぞれ持ち寄っているだろう。

しばらく歩くと聞きなれた声がしてきた。みんながいる。同僚の1人がみちるに気づいた。

「みちるー」

「お待たせ。待ったでしょ」

「いいの。まだ全然人数そろってないし」

みちるが今話している同僚は先ほどみちるに電話をしてきた夏川ちはるといった。

みんなそこそこに挨拶をして、みちるも手伝いに入った。野菜を切

つっていると声をかけられた。

「凧野さん」

まな板から顔を上げると、そこには氷室がいた。

「氷室さんもいらしてたんですか」

ニコッと笑顔を見せる。氷室の私服はみちるの想像していた勝手なイメージを覆さず会社の外でも洗練されたものを身に付けている。

2人で話を続けていると

「ほら、お2人さんが止まってるよ」

ちはるが茶化すように横槍を入れる。

「はいはい。ちはるは人1倍食べるからね」

みちるがやり返して、再び野菜を切り始める。野菜を切りながらもみちるはこの場の面子を見て気づいた。そういえば山田がいない。

「山田君、いないんですね」

「ああ、彼か。そういえばいないね。気になる？」

氷室は微笑んで聞く。

「いえ、そうじゃないんですけど・・・いつもなら行事に参加しているのになと思って」

「そうだね」

それ以上山田の話は出なかった。あとはメンバーが入れ替わり立ち代り、普段仕事場では話せないようなこともたくさん話せてとにかく楽しい時間だった。

陽も傾きかけた頃にバーベキューの会は解散となった。みんなそれぞれに家の方向へと帰って行く。

みちるは1人で河川敷から土手にのぼり、紫がかり始めた空と、淡く黄色く光る菜の花を眺めて楽しんでいた。みちるは夕方が好きだった。夕方は曖昧になる。空の色も空気も全部。1秒1秒、移りゆくのが美しい。そう浸っていると、突然目の前が真っ暗になった。誰かに目隠しをされた。

「!?!?」

びっくりして振り返ると、

「ごめん、びっくりした？」

少し鼻にかかったような、低く甘い声。いつも会社で聞いている声だ。

「どうしたんですか？」

風が強くて目が開けられない。少し薄目になる。風が軽くウェーブのかかったみちるの髪をさらっていった。

「僕も帰り道こっちなんだ。一緒にいいかな」

相変わらず、嫌味のない爽やかな笑顔をみちるに向ける氷室がいた。

「もちろんです」

間髪入れずみちるは笑顔で答えた。

現場不在証明 アリバイ(前書き)

週一で書けたら…と思っていたのですが、引越しやらでなかなか
o r z

現場不在証明 アリバイ

夏川ちはるは夕暮れの中を自宅へ向かって歩いていった。

バーベキューを行った場所からは徒歩で帰れる距離だ。みちると氷室さん、いい感じだったな。とひとり考えてニヤニヤと笑いながら歩く。どうやってくっつけようかしら、なんてあれこれと考えて歩いていると、もう目の前の角を曲がると自宅へ着くということろだった。

時折強く吹き付ける風には段々湿り気を帯びてきた。空の半分が紫色に染まる頃。突然ちはるの肩を誰かが叩く。振り向いたちはるは短く悲鳴をあげたが、次の瞬間にはそこにはなにもなかったかのようになんか静けさが戻っていた。

みちるは氷室と家路を辿っていた。バーベキューの話から、会社の話、休日の過ごし方などにかく話が尽きなかった。みちるは腕時計をチラッと見ると

「もう6時前なのに、こんなにまだ明るいですね」

「梅雨がもうすぐ来て、蒸し暑い夏がまた来るんだな」

「夏は嫌いですか？」

「得意ではないな。ジメジメしていて、寝苦しいし」

「そうですね…でも私は、短くてあつという間だから思いっきり楽しんで、いつも最後は夏風邪引くんです」

みちるは苦笑いした。

「へえ、意外だな」

「海に行つてはスイカ食べて、かき氷食べて、焼きそば食べて…あとはお祭りでも食べるし、花火大会でも…」

「よく食べるんだな」

みちるは恥ずかしそうに笑った。

「兄弟っているの？」

「います。兄が二人と弟が一人」
「4人兄妹か。めずらしいな」
「これがもう…個性がバラバラで面白いんですよ」
「楽しそうでいいな」
「氷室さん兄弟は？」
「俺は…実は施設で育ったんだ」
「えっ…」
「あ、そんなに深刻な顔しないで。気づいた時には施設にいたし、一緒に育ったみんなが兄弟だよ」
「ひとりじゃないって気づけることは、幸せなことですね」
「そうだよ…でも時々恐くなるんだ」
「怖い…？」
みちるは氷室の顔を下から覗き込むようにして聞いた。
「自分は誰の子供で、どんな風にして生まれたのかも知らないし、この名前だって本当に自分のものかもわからないんだ。だから…」
「
と言いかけてみちるの顔を見ると、悲痛な表情を浮かべていた。
「もうよそう。せつかく楽しんだ後だったのにな」
「いえ、いいんです。あつ、あそこが家です。もう大丈夫です」
みちるが指を差したのは立派な平屋建ての日本家屋。金持ちの家か、もしくはちょっと恐い人の家か。どっちかの印象を持つ家だ。
「すぐ立派な家なんだね…」
氷室は呆然として風野家を見つめた。
「古いだけです。代々うちはこの家に住んでいるんです」
「温かさに包まれている家だね」
「なんだかんだで喧嘩したりもするんですけど、申し訳ないくらいきつと幸せなんですよ」
「いいんだよ。幸せの形は人それぞれだから。自分を基準にしたらなんでも申し訳なくなっちゃうさ」
「氷室さんは優しいんですね」

振り向いてみちるは笑う。氷室にはその笑顔が眩しかった。

「風野さん…！」

突然氷室がみちるの両肩を掴んだ。

「氷室さん!？」

「僕は…」

と言いかけたところで

「みちるー」

とやる気のない聞きなれた声が前方から聞こえた。声に反応して2人は離れる。

「タカ兄…」

「今帰り?こちらは…」

「氷室と申します」

「会社の先輩よ」

「このわがまま娘がいつもお世話になっております」
うやうやしく頭を下げる。

「一歳年上の兄です」

「どうも…」

「今日晩飯すき焼きだつてさー」

「もうわかった。すぐ行くから」

隆哉を追い払うと氷室に向き直って

「すみません、お話の途中だったのに」

「いいんだ。また改めて。それじゃ」

「お気をつけて」

手を振って氷室はくるりと向きを変えると、振り返ることなく帰っていった。

みちるは後姿を少し見送ってから門戸をくぐった。

翌朝。いつものドタバタをする朝がやってきた。そしていつも通りの時間にみちるは家を出る。いつもの時間の地下鉄に乗り、いつもの歩幅で会社へ向かう。ICチップの入った社員証を電子ロックに

かざしてオフィスに入ると、いつもの光景ではなかった。ざわついていて、みんな落ち着きがない。みちるが席に着くと

「風野さん、ちょっと」

みちるたちの直属の課長が手招きする。

「なんででしょうか」

「実はね…夏川さんが昨夜から行方不明なんだよ」

「えっ…」

「それで昨日のうちに連絡がなかったかみんなに聞いてるんだよ」

「そうだったんですか…でも、昨日は昼から夕方にかけてバーベキューをして、解散した後は彼女と連絡は取っていないんです」

「やっぱりみんなと同じか。ありがとうございます」

席に戻るとみんながみちるに寄ってくる。同僚のひとりが口を開く。

「なんて聞かれたの？」

「ちはると昨日連絡したかって」

「それでみちるは？」

「バーベキューを解散してからは特に連絡取ってないわ。まさかこんな事になるなんて…」

先日の女性社員が行方不明になってちはるで2人目だ。男女問わずみんな不安そうな顔をしている。

「みちるも気をつけなよ？」

「うん、ありがとう…」

世間で騒がれている女性連続行方不明事件はちはるで10人目となった。同じ会社で2人も行方不明者が出たとなれば、マスコミも放って置かないだろう。会社の朝礼ではマスコミ対応のレクチャーが行われた。

午前中にはちはるの捜索願が警察へ提出された旨をみちるは聞いた。ちはる…いつも明るくて、同期の中では一番仲がいい子。そんな彼女が突然いなくなってしまうなんて。今どこにいるんだろう。苦しんでいないか、痛い目には合っていないだろうか。両手を固く結んで

目を閉じると涙が一筋流れた。

「大丈夫？」

突然声をかけられてハッと目を開けた。左目から涙を流したまま振り向くと、氷室がいた。

みちるは昼食からの帰りでエレベーターホールでエレベーターを待っていたのだった。いつもはちはると行く昼食も今日はひとりだった。

「すみません、考え事していて」

「夏川さんのことが…きつといい方向にいくよ。信じよう。そういえば…」

氷室が声を潜めた。

「山田君が警察に任意同行で連行されたそうだよ」

「えっ？」

「夏川さんの家の近所で昨日の夕方に彼の目撃証言があるんだって」

「そうですか…なにかわかるといいですね」

みちるは山田が任意とはいえ、警察に連行されたことに驚いた。いつもひたむきに仕事をこなしていた、一生懸命という言葉が似合う彼が…。

告白（前書き）

8話、あしかけ3日かけて書いたのにうまくアップできてなかった
…。ありえないくらいシヨックです。もうあんな長文を書き直す気
力がないので、当初の8話は8話と9話に分けます。しくしく…

告白

ちはるが行方不明になって三日目。会社の中で親しかった人間やバーベキューに参加したメンバーは警察から話を聞かれたが、あつさりしたものだ。みちるも調書を取られたが、みんなと一緒に30分ほどで終わった。しかも、会社の接客ブースで調書は取られたので、拍子抜けしてしまった。社内での最初の頃の動揺は収まりつつあったが、相変わらずみちるの心に平安は訪れない。仕事中はそれでも打ち込もうと必死だった。そうすることで、いつもの自分を保とうとしていたが、とつくに周りの同僚たちはみちるが落ち込んでいることに気づいていた。ふと時計を見ると、お昼まで15分を切ったところだった。さつき始業の朝礼をしたばかりのような気がしたので、時間の経過の早さに驚く。軽くため息をついていると、誰かが傍に来た。振り向くと氷室がいた。

「どうしたんですか」

「ランチって、誰かと行く予定あるのかな？」

「最近は何りで行ってます。今日も特に約束はありません」

「ランチ、誘ってもいいかな」

「ええ、構いません」

「じゃあ後で。エントランスで待ってるよ」

「わかりました」

誰かと少し話をすると気分が落ち着いた。最近会社ではあまり喋っていないことに気づいたが、もちろんそれはちはるがいないから。昼食もいつもちはると一緒に行っていた。あれこれと迷うみちるはいつもちはるに行く店を決めてもらっていた。いつになったらちはるは戻って来るのだろう。ちはるだけじゃない、他にも行方不明になった人はいる。待つ人間はいつになったら眠れない夜から開放されるのだろうか。そんなことを思いながらも書類に目を通して、12時のチャイムが鳴る。12時から昼食に出る人間はやれやれと

伸びをしたりして、ひとりで行く者、連れ立って行く者とざわざわと出口に向かって行く。氷室は先に出たようだ。みちるも昼食に出て行く者の後に続いてオフィスを出る。すると廊下がざわついていゝる。何かあったのだろうか。

「どうしたの？」

近くにいた後輩に聞く。

「みちるさん、あれ見てください」

後輩が指差した先には山田がいた。警察から釈放されたのか、特に付き添いの刑事もおらず、会社に出てきたところを男性社員に捕まっていた。

「山田君…無罪放免になったのかしら」

「多分、証拠不十分だったんじゃないんですか。それじゃ」

これ以上昼休みの時間が削られるのがもったいなかったのか、後輩はそう言うたとさつさと行ってしまった。それでも野次馬は一向に減らなかつたが、山田が野次馬の中にみちるがいるのに気づくと足早に歩み寄ってきた。最初は誰を目当てに歩いてきていたのかわからなかつたが、

「風野さん」

と山田が呼ぶとみちるに注目が野次馬から一斉に寄せられて、みちると山田の間に道を作る。急に呼ばれたみちるは戸惑った。

「山田君…無罪放免になったのね」

「もちろんですよ。僕はやっていません」

今までの会社で見る山田とは違う。力強く自信に満ちている。

「だったらよかった」

「風野さん、あいつには気をつけてください。もうあなたのすぐ傍まで来ています」

「え？」

山田が放った言葉にみちるは困惑を隠せない。周りの野次馬も何のことだか理解できずにざわめくばかりだ。訳がわからず立ち尽くしている、みちるは時間を思い出した。慌てて腕時計を見ると12

時10分に時間が差し掛かろうとしていた。

「山田君ごめんなさい。私約束があるからまた後で話し聞かわ」

そう言ってみちるが駆け出そうとすると、山田がみちるの腕を強く掴む。

「風野さん、僕は冗談を言っているんじゃないんです。早く手を打たないと…」

「ごめんなさい。何を言っているのか…」

急に山田がみちるの腕を掴んだので周りの野次馬からのざわめきが大きくなった。

「いやっ…離して！」

みちるが悲鳴をあげたので、何人かが山田をみちるから引き剥がす。「風野さん早く逃げて！」

など様々に声を受けて、みちるは急いで氷室との待ち合わせ場所に向かう。角を曲がる時にちらつと山田を見ると何人かの男性社員に押さえつけられてもなお、何かを叫んでいた。エレベーターを待つと時間がかかるので、階段を飛ぶようにして下りた。ビルのエントランスでは日に日に強くなる日差しを避けるように氷室が待っていた。走ってきたみちるに気がついて笑顔になる。

「遅くなってごめんなさい」

「変な電話にでも捕まっちゃった？」

「それが…」

みちるは今しがたあった出来事を氷室に話すと、一瞬冷たい目をした気がした。だが、もともとどこかに冷たいものを持っているのは感じていたことだ。みちるは気にしないことにした。

「変なのに捕まっちゃったね。おいしいもの食べて忘れよう」

すぐに笑顔に戻るとみちるを促して歩いた。

「ランチのお店…全然決めてませんでした、私」

「俺は当てがあるんだけど、そこでいいかな？」

「構いません。楽しみです」

「ハードル上げるなよ」

みちるの言葉に苦笑いをする。店は大通りから1本中に入ったところで、片道2、3分の距離だった。店自体は小ぢんまりしていて、店と知らないと素通りしてしまいそうだ。氷室は顔なじみのようで、一言一言店主と話すと、奥の席に通された。二人ともランチセットを頼んだ。水をひと口飲んで落ち着くと、みちるが先に口を開いた。

「今日はどうして誘ってくださったんですか」

「君があんまりにも落ち込んでるからだよ」

「私、そんなに落ち込んで見えますか」

「ああ…みんな心配してるんだから」

「いつも通りに振舞おうとしてたんですけど…ポーカーフェイスが下手ですね、私」

「こんなの上手い下手の問題じゃないだろう。辛いときは辛いつて言えよ」

氷室がいつもらしからぬ少し強めの口調で言うので、みちるは驚いた。いつも穏やかなのに、この人はそんな面もあるのか。

「すみません」

みちるはつい謝っていた。

「ごめん…君に謝らせるつもりじゃなかったんだ」

ちょうどそこで料理が運ばれてきたので会話が途切れた。この日の昼食はワンディッシュユミールになっていて、一皿に前菜からメインまで盛り付けられていた。デザートとコーヒーはまた後から運ばれてくる。

「食べようか」

氷室が促す。

「期待通り、おいしそうですね」

雰囲気や和らげるために、みちるは悪戯っぽく笑って言った。そんなみちるの表情に安堵したのか

「やっぱり君は笑っていないとね」

氷室はほっとしたかのように言った。

「今は…信じて待つしか私にはできませんけど、なんか大丈夫な気

「がするんです」

「俺もそう思うよ」

不安な時はとにかく自分の考えが正しいと言ってくれる存在は大事なのだ。それからは他愛のない話もした。昨日見たテレビの話、最近読んだ雑誌、好きなもの嫌いなもの。みちるは花が好きだ。風野家の庭は女3人で育てた花が春から秋にかけて咲き乱れる。小さな梅の木もあって、梅雨前にはぶつくりと丸い実をつけるので、それを梅酒にしたりジャムにするのが毎年の楽しみである。みちるの話聞いた氷室は感心して聞いていた。

「まめなんだね。俺には真似できないよ」

「好きだから続けられると思うんです」

「俺もなにか始めようかな。風野さんスポーツは？」

「私は水泳をしました。でももう学生時代の話ですから」

「水泳か。お兄さん達は何かしてたの？」

「1番上の兄は殺陣を何故か習っています。役者じゃないのに…。2番目の兄は野球を高校の時にしました。弟は…なんだかよくわかりません」

「でも仲がいいんだな」

「そうなんですかねえ」

「この前送っていった時に会ったのは2番目のお兄さんだったね」

「そうです。弟とよく食べ物のことで喧嘩になるんです。子供っぽくて」

「楽しそうだな」

氷室は笑った。メインは食べ終えていて、後はデザートを残すだけだった。店主が食後の飲み物を訊きにきたので、みちるはコーヒーを紅茶に変えてもらった。メインの皿が下げられて、デザートを待っている。氷室がおずおずと口を開いた。

「実は、今日誘ったのはもうひとつ理由があるんだけど」

「なんですか？」

「本当はこんな時に言うべきじゃないんだと思ってたんだけど…」

「言ってください。私気にしませんから」

「そうかい」

「はい」

少し間を置いて氷室が言った。

「僕と結婚を前提に付き合ってもらえますか」

「私と、ですか」

「急に迷惑だよ。夏川さんのこともあるのに……ごめん」

「そんな、謝らないでください。私は……」

みちるはうまく答えられなかった。

告白（後書き）

ちよっとつじつま合わなかったので一部訂正しております。
記憶力…やばい

覚醒（前書き）

かなり投稿が遅くなってしまった…

覚醒

みちるは氷室からの突然の告白に頭の中は真っ白だった。あれから何を話して、どうやって会社まで戻ったのかあまり覚えていなかった。仕事も集中しようとするほど気が散漫になる。今日はもう早く帰ろう。こんな日は早く帰ろう。

でも今日はもうひとつ早く帰りたい理由があった。今日は待ちに待った満月の日。清めの儀式をする日なのだ。もちろんそのことも覚えてはいる。

昼食から帰ってきてからしばらくは集中したくてもできなかったが、段々軌道に乗ってくると昼間のことも忘れていった。

気がつくとき喉が渴いているのも忘れて仕事に打ち込んでいた。お茶を入れようと席を立つついでに、周りにも声をかけたが、みんなお茶はまだカップに残っていた。みちるが男女問わず好かれているのは、こういう気配りを忘れないことだ。自分のカップと緑茶のティーバッグを持って給湯室へ席を立つ。

給湯室は一旦廊下に出て行くので、あまり人気はない。カップを電気ポットの注ぎ口の下に置いて静かにお湯を注ぐ。無色透明の白湯には、瞬く間に鮮やかなうぐいす色が広がる。少しティーバッグをお湯の中で揺らしてもっと濃い緑にする。お茶は少し濃い方が好みだ。もう少してティーバッグを引き上げようとしていると

「風野さん」

突然呼ばれて、驚いて振り向く。

「山田君…」

「先ほどは失礼しました」

「ううん。いいの。それより私に言いたいことがあったんじゃないの?」

「本当に、あいつにだけは気をつけてください」

「ねえ、あいつって誰なの。何のことを言ってるの?」

みちるは戸惑うばかりだ。

「その…僕は…」

山田は何かを口ごもっている。その時氷室が給湯室の前を通りかかる。

「何してるの」

「氷室さん」

昼間に告白されたばかりの人間が来てみちるは更に戸惑った。

「山田君、昼間も凧野さんを困らせたんだろう。感心しないね」

「違います！僕は…」

氷室と山田の間にはみちるにはわからない何か険悪なものが漂っていた。

「えっと、あの、私仕事に戻りますね」

「僕は明日から出社になります。これで失礼します」

みちるが言い切る前に山田は早口に言っつて、足早に去っていった。

「大丈夫だった？」

氷室はいつもの優しい笑顔に戻っていた。

「話をしていただけですから…山田君、何を伝えたかったんだろう

…」

山田の去った方向へ視線を向けながらみちるは呟いた。カップの中の緑茶は出すぎて少し濁っていた。

みちるは何がなんだかわからない内に仕事を終えて、帰路についていた。

地下鉄を降りて、自宅への道を心あらずといった感じで歩いていると、ラベンダー色の空に満月がこれから昇ろうとしているのが見えた。

今日は儀式を行う日だ。気を引き締めなければ。そう思いを改めて玄関の戸を開ける。

「ただいま」

「おかえりなさい」

食卓から母の声が飛んでくる。

みちるは靴を脱ぐと、今日は食卓に顔を出さずに真つすぐ自分の部屋へ向かった。鞆をいつもの場所に置いて、上着をハンガーにかけ、自分の机の上を見ると、以前夢の中から持って帰ってきたあの砂がガラス瓶の中で不気味に鎮座している。相変わらず青白く淡い佇まいだ。思い直して、今はとにかく楽な恰好に着替えて食卓へ向かう。

食卓では夕食の支度ができていた。あとはみちるが揃えば食事が始められる段階だ。

「みんなお待たせ」

みちるが食卓へ現れる。

「さあご飯にしましょうか」

母の飛鳥が全員分のご飯を持って来た。

「晩ご飯トンカツって・・・受験じゃないんだから」

隆哉が冷静に突っ込む。

「いいじゃん。失敗できないことには変わりはないんだから」

翔太がすかさず言い返す。

「文句あるならもらってやる」

勇一郎がめずらしく茶々を入れて隆哉のトンカツを取ろうとするしぐさをした。

「誰も食わないとは言っていないだろ」

「もうちよつと静かに食べられないのかねえ、うちの子達は」

飛鳥は呆れながら子供達の様子を見る。みちるはいつも通りに騒ぐ兄弟達の様子に笑いながらも、これからある儀式のことで頭が一杯だった。

食事はいつもの様に楽しく箸がすすんだ。みんなが食事を終えてお茶を飲んでいると、突然父の光司が口を開いた。

「裏の山に行くのって…今晚か」

わかりきったことを今さらながらみちるに聞いてくる。

「ええ、そうよ」

みちるは穏やかに答えた。

「…無理して行くことないのじゃないか」

湯呑みに目を落として言う。父の言葉には不安が濃く滲んでいた。いつもと違う父の様子に一同も静まり返ってしまふ。

「お父さん…」

みちるはそう言ったまま言葉が続かなかった。食卓の空気が重くなり、誰もが口を閉ざしていたところに

「親父」

勇一郎が静寂を破った。

「俺はただ心配して見守るだけで終わるつもりはない」

「どうということよ？」

母の飛鳥が光司の代わりに聞く。

「俺も山に入る。ただし、みちるが先に入って時間を置いてそれから」

「なんだよ」

勇一郎が言い終わらないうちに隆哉が喋った。

「俺もこっさりついて行くつもりだったのにな…抜け駆けするなよ」

「それは俺の台詞！」

翔太も慌てて話しについて行っている。

「本当に…うちの子たちはやんちゃなんだから…」

そう言いながらも飛鳥は感激で目を潤ませていた。

「どうやら決まりのようだね？」

ユリが終始見届けてからみちるに事の行方を任せた。

「もちろん…行くわ」

聡明で力がみなぎった瞳をして頷いた。

「お父さん。大丈夫よ。みんな来てくれるって言うし。心配しないで、必ず帰ってくるから」

「約束だぞ」

まだ心配そうに娘を見る父。

「なんか父さんらしくないなあ。どうしたんだよ」

翔太は茶化すように言いうと、

「空気読め」

「馬鹿」

「ゴン」

兄たちから罵られ、最後に母からお盆で叩かれる始末。

また凧野家には明るい笑いが戻っていた。

夜8時もまわると、凧野家付近は人通りがぐつと少なくなる。周りの家々からは明かりが溢れ、どこの家からか時折談笑が漏れ聞こえてくる。平和の象徴なのかもしれない。

みちるはユリに渡された白装束を着ていた。白い着物に帯は灰色で光沢があった。切れたチエーンを皮の袋に入れたのを確かめて、石を改めて首から下がっていることを確認。

「よし。行こう」

息を強く短く吐くと、自室を出て玄関へ向かった。

玄関では家族全員が待っていた。

「みんなで見送り？仰々しいんだから」

みちるは少しでも雰囲気を明るくしようとしたが、やはり兄達がついて来るとなっても心配なものは心配なようだ。

足袋と草履を履く。くるりと家族の方に向き直って

「じゃあ行つてきます」

まるで会社にも行くかの様に笑顔を見せてみちるは玄関を出て行った。

みちるが出て行くと男3人も仕度を始めた。翔太はいつもの恰好にいつものお札。隆哉は野球をしていたからか、キャッチャーの防具に竹刀を持ち出してきた…。

そして勇一郎は凧野家でもあまり誰も立ち入らない最奥の6畳ほどの和室にいた。そこは部屋の位置のせいなのか、昼間でも薄暗く、

小さい頃は恐くて近寄りさえもしなかった。

「龍之介じいさん、借ります。みちるのために力を貸してください」
そう独りで言って、床の間に飾ってある日本刀に一礼をすると、う
やうやしく持ち上げて自分の脇に携えた。

玄関に勇一郎、隆哉そして翔太が揃うとみちるの後を追って出発す
ることにした。

「みんな気をつけるのよ。みちるをお願いね」

母が念を押すように3人に言った。

「わかった」

勇一郎が力強く頷くと残りの2人も続いて首を縦に振った。

「じゃあ行ってくる。多分大丈夫だと思うよ」

二カつと翔太が笑うと男3人は玄関を後にした。

「大丈夫かしらねえ…男禁制の裏山に行くなんて」

「なんとかなるんじゃないのかい。意外と男がだめなんて迷信かも
しれないしね」

「…」

飛鳥、ユリ、光司の順番に心配しながら息子達の後姿を見送るので
あった。

みちるはすでに山に入っており、満月が白く闇を照らす中、自分の
胸くらいの高さまで生えた草の中をけもの道を辿りながら進んでい
た。少し山道を入ってから住宅街で感じられた、すぐそこに人た
ちが暮らしている息づかいがウソのように静寂に包まれた。ひとり
で恐怖と不安を感じる自分と戦いながら山の中腹まで差し掛かった。
道の続きを眺めると随分古くなった山門が口を開けてみちるを待ち
構えている。山門から先は突然木が鬱蒼と生い茂っており、道の真
ん中を月明かりが照らしていた。

「嫌だ…かなり勇気がいるわね」

ふーっと息を吐くと月明かりで銀色に染められた両手を眺めて、よ

し、と自分を奮い立たせて山門へ向かった。

近くまで来ると、山門は古いのだが、かと言ってそうそう簡単に壊れてしまうようなものでもなかった。誰に見られているということでもないのだが、みちるはそうつと山門をくぐる。

山門をくぐった瞬間、全身に鳥肌が立ち、なにか心臓にゾクツとしたものを感じた。

わたしでも流石にここはなにが違うってわかるわ とみちるは思った。

さらに周りを警戒しながらみちるは儀式を執り行つべく、先へとすすんだ。

勇一郎、隆哉、翔太は風野家の玄関を出て、裏山への上り口にいた。

「そついえば…道って誰かわかるのか？」

隆哉が口を開く。

「なんとなくわかるんじゃないの？」

翔太がのん気に答える。

「道は1本しかないだろう」

勇一郎は間違いないというふうに答えた。

翔太はいつもの恰好、隆哉は野球のキャッチャーの防具に竹刀、勇

一郎は…腰に日本刀を下げて袴を着ている。

「…2人とも暑くないの？」

翔太が鬱陶しそうな目で2人の兄を見る。

「暑いつていうか重い」

「別に」

前者が隆哉、後者が勇一郎だ。

「あつそう…」

裏山は風野家のもちろん裏にそびえている山なのだが、隣家との間の路地を抜けて緩やかな坂を上り、椿の木やくすの木が折り重なつてまるでトンネルのようになっていいる枯葉の重なる道と抜けると、さきほどみちるが歩いていたけもの道のある場所に出る。

なんだかんだと3人で他愛もないやりとりをしていると、開けた場所に出た。

「明るくなつたな」

そう言つて勇一郎が銀色に光る満月を見上げた。ただし、みちるが先ほど歩いてきた時と様子が全く違う。みちるの胸まであつた草はまるで通せんぼをするかのように2メートル以上の高さに伸びていた。そしてあるうことが、けもの道は山門とは全く違う方向に伸びており、正直に辿つていけば元の道に戻ってしまう。早速3人に山の洗礼が降り注いだというわけだ。

「これじゃあ全く行き先見当つかないじゃん」

翔太が口をとがらす。

「お得意の靈感でなんとかならねえのかよ」

隆哉が翔太を突つついて言う。

「俺の靈感はこういうのはあてにならないよ。俺は攻撃専門だから」

「頼りにならねえの」

2人がやり取りをしている中、勇一郎は1人冷静にそびえる草を眺めていた。勇一郎のことなので、とうにけもの道の存在は確認していたが、安易に進めなかつた。そんな時に

「とりあえず入ってみたらなんとかなるよ」

翔太が草むらに分け入つていった。

「待て翔太！」

勇一郎が止める前に翔太がけもの道を発見した。

「なんだ。こつちに道があるじゃん。楽勝楽勝」

「待てつて言つてるだろう！」

勇一郎が慌てて突き進む翔太を追いかけて草むらの中に入る。草に触れるとなんだかビリつとした感触がする。一瞬立ち止まって自分の手を見たが、なにも起こつてない。とりあえず自分の声が届いていない翔太を止めなければ。

「翔太ー！」

後ろから刀の鞘ごと翔太の後ろ頭に向かって振り下ろした。

みちるは木が鬱蒼と生い茂る道を歩んでいた。月明かりが道を照らしているが、木が作り出す陰からなにかが出てくるのではないかと恐れていた。時折吹き付ける風でサワサワと葉が鳴る。

誰かが一緒に歩いてくれたら心強いのにな。胸の中でつぶやいて、なんだか自然に氷室の顔が浮かんでいた。昼間の告白には戸惑ったが、今はみちるのこの状況において心強い味方だ。これを使い越えたら、また明日会える。そう思えるようになった。

ひたすらに進むと、鬱蒼とした木々が途切れるのが先に見えた。きつとあそこがユリに言われた場所だ。あとは儀式を無事に終えて道を来たとおりに引き返すだけだ。はやる気持ちを抑えつつも、みちるの足取りは速くなっていた。

翔太は勇一郎の膝枕の上で目を覚ました。

「…!？」

「目を覚ましたか」

覗き込むようにしていた隆哉が珍しい動物でも見るかのような目つきで言った。

「あれ？なんで、勇兄ちゃん？」

翔太は草むらで勇一郎から会心の一撃を後頭部にお見舞いされたあとに、一度草むらの手前まで勇一郎に担がれて戻ってきた。

「お前なんにも覚えてないのか」

勇一郎が呆れたように言う。

「うん。なんか草むらに入るまでは覚えてるんだけど…それからフワフワしちゃって…気づいたらコレだよ」

「これが男子禁制ってわけか」

うーん、と隆哉が唸って草むらを眺めていると、勇一郎が翔太の頭を自分の膝から退かせて立ち上がり、草むらに入っていく。

「おい、勇」

「ん？」

隆哉の制止に振り返る勇一郎。

「…そうか。翔太を追って入ったときって、なんともなかったよな」
「ああ、だから…」

そのとき、また先ほどと同じビリビリとしか感触が勇一郎を襲った。なんとなく前を見ると、みちるの歩く後姿が見えた。しかしその姿は消えそうになったりはつきり見えたりと、まるで幽霊のようだと例えたほうが適当だろうか。

「…??」

勇一郎は呆然として前を見たまま固まってしまった。

「どうしたんだよ」

翔太を置いて隆哉が追いかけて来た。

「いや…なんでもない。それよりお前はなんともないのか」

「うん。翔太はへらへらしてるから騙されやすいんだよ」

「そうかもしれんな」

「なんだよ。俺のいないところで悪口かよ」

いつの間にか翔太が来ていた。

「お前今度はなんともないのか」

勇一郎が翔太に聞く。

「勇兄ちゃんに殴られたおかげで正気になったんじゃないのかなあ」

「少しはましになったらろう」

「俺は元からましだよ!」

翔太がふくれっ面をする。

「それより勇兄。どう進む?」

隆哉が勇一郎に聞いた。

「ん?こっちに行ってみようと思う。はぐれるなよ」

「…はい」

聞き分けのいい小学生よろしく隆哉と翔太は返事をするのだった。

進む方向とは、もちろんみちるの後姿が見えた方向へ。

時々見えるみちるの後姿を頼りに勇一郎が進み、あとの2人が進んだ。10分ほど進んだところで、草の間から山門が見え隠れするよ

うになった。

「山門が見えた。もう少しで草むらを抜けるぞ」

「わかった」

「暑い…竹刀だけにしとけばよかった…」

3人は山門の前で小休止をとった。しかし、あまりのんびりもしてられない。みちるに何かあったときにすぐに駆けつけられるようにも。

「結構体力削られたな」

汗びっしょりになりながら、それでも防具を外さずに座り込んで言う隆哉。

「それってタカ兄だけだろ」

翔太はどこ吹く風、といった感じで涼しい顔をしている。勇一郎はひとり黙って先ほどのみちるの幻影とでもいうのか、不思議な出来事を考えていた。あの様子では勇一郎以外は見えていないようだ。隆哉も翔太も勇一郎をあてにしてついて来ていた。体に電流が流れるようなビリっとくる感覚。生まれて初めてのことだ。さすがの勇一郎も少し動揺していた。

「そろそろ行く？」

翔太が聞いてきた。

「そうだな…しかし、この先は今までとはわけが違う感じがするな」

「うん…一杯『い』る『よ』」

勇一郎と翔太が話をしている後ろで聞いていた隆哉は

「全然わかんねえ」

とつぶやいた。

3人で山門の前に立つ。勇一郎と翔太は警戒してぽっかりと口を開けた山門の奥を覗んでいる。隆哉は時間の無駄と思い、

「お先に〜」

と軽々と山門をくぐって、すたすたと進んで行った。

「あっ…」

「タカ兄…」

あつけない隆哉の行動に拍子抜けする2人。

「なんだよ2人とも…早く行こう…」

「兄ちゃん後ろ…!」

隆哉が言い終わる前に、翔太が隆哉の後ろを指差し、お札を構えた。

「えっ??」

後ろを振り向くが隆哉にはなにも見えていない。翔太と勇一郎に見えたのは、全身が青白い髪の毛の長い女の姿をした悪霊とでもいうのが隆哉に向かって飛んでくる。

「くそっ!」

間に合わないと思い、翔太は飛ぶようにして隆哉のもとに向かったその瞬間。

「バチイツ!!」

弾けるような音がして女の姿は消えていた。

「えっ…?」

翔太は突然の出来事に困惑する。

「俺にも…見えたけど、消えた??」

勇一郎に関しては初めてづくしでさらに困惑していた。

「俺、なんかした??」

一番わかっていないのは隆哉であった…。

出現（前書き）

かなーりマイペース更新ですね…

出現

凧野家では、子供4人がおらず、いつもと違う静かな夜を送っていた。

飛鳥は子供達のことを案じながらも食事の後片付けをしている。ユリも少し気がかりなのか、食卓でお茶をすすりながら本を読んでいた。光司は縁側から裏山を眺めては行ったり来たりしている。

翔太たちが山門に差し掛かった頃、例の悪霊との接触をユリと飛鳥が感じ取ったようで、光司のいる縁側にドタドタとやってきた。

「2人ともどうした？」

光司がすつとんきような声を出して聞く。

「何か変わったことなかった？」

飛鳥が聞く。

「いや…俺にはわからなかったが…」

「少し気になるけどね。あの子たちならなんとかなるよ」

「そうねえ…なんとかしてもらわないと困るわよ…」

3人で心配そうに裏山を見上げた。

その頃裏山では

山門に差し掛かった翔太たちは、まさに牛歩と呼べるペースで山を進んでいた。

もちろん、例の悪霊たちを相手にしながらなのである。

「くっそ、こいつらいくらでも出てくるな」

「みちるはどうやってこの中を進んだんだ…」

翔太と勇一郎が悪態をつきながら手際よく敵をさばっていく。

全くなにも見えない隆哉は2人が真剣な顔をしながら刀を振り回し、お札を投げつけているのが滑稽だったが、あまりにも2人が真剣なので、隆哉も真剣な顔だけして進んだ。

でも本当に戦っているのだと思えるのは、翔太のお札が敵であろうものに当たった瞬間に消失することだった。自分にも見えたら何かできるのか 少しだけ、無力な自分に苛立ちを覚えた。

みちるは鬱蒼と木が茂る道を抜け、石段を登りきると大きな鳥居をくぐり、月明かりに照らされる井戸と社を見つけた。

まずはユリに教わった通りに、社の中にある白磁で出来た大きな杯を取り出すことにした。

社はもちろん木製で、年月を感じさせたが、さきほどの山門同様、簡単に壊れるようなものではないと感じた。小さな金具で簡単に戸締りをされた木戸を開く。中には、ぼつりと白磁器だけが納められていた。

みちるはそつと両手でそれを取り出し、月明かりの元にさらす。

今度は杯を井戸のそばに持って行き、つるべを垂らして水を汲む。

井戸は青白い地面にポツカリと口を開けており、恐る恐るみちるは井戸の中を覗いた。縄を引っ張ると、水を少しづつこぼしながら、つるべが上ってくる。

杯で井戸水を汲む。想像以上につめたくて、一瞬動きが止まった。

それから杯の8割りほどに水を汲んで半分を飲む。もちろんつめたいので、少し身震いした。それから水の模様が浮かぶ杯に首からかけていた石を、紐まで全て沈める。月明かりと純粋な井戸水で全てを浄化させ無に帰すのだ。手を合わせて祈るように目を瞑る。しばらくすると、浄化のせいなのか、以前に負った首の傷辺りが少し痛んだ。

ふと目を開けると、どれだけその場で祈りを捧げていたのか、少し身体が冷えたような気がした。

杯を見ると、驚いたことに白く濁っている。きっと今までの邪悪なものが全て水の中になじみ出たのだろう。傷のあった首筋に手をやると、傷もなくなっていた。もうこれで怯えることもなくなる。

みちるはほつとすると、濁った水を井戸の中に捨てた。ユリ曰く、この井戸の中に葬られたものは二度と這い上がってくることはできないのだという。覗いてみると、白く濁ったものはみるみるうちに井戸の奥底へ沈んで行った。そして以前何者かにちぎられたチエーン。これも皮の袋ごと井戸へと投げ捨てた。これも面白いように沈んで行った。

そして念のために杯と石をもう一度水で洗う。石は相変わらず血のような色をしているが、以前よりも鮮やかになった気がする。

全てを元に戻し、石を首にかけ、帰路につく。途中で翔太たちに会えるだろうか。そう考えながら石段を下りる。山の下では家々に明かりが灯っている。早く家に帰ろう。心配そうにしていた父の顔を浮かべながら木が生い茂る道へ入る。もう、全てが終わったのだからにも恐くない。よく見たらところどころ月明かりが漏れて幻想的じゃない。なんて思っていたら不意に山の斜面側へみちるの身体が引つ張られる。

(どうということ…!!?)

あまりにも突然で、ものすごい力だったので、声どころか息をするのも忘れていた。

今みちるは木々を背に、礫にされているような恰好だった。手、足、そして口を誰かの手で後ろから押さえられているような感じを受けた。どんなに力を入れても動けない。一体何が起きたのか。

(3人とも早く来てよ…!)

目をぎゅつと瞑って力強く念じた。

翔太たちは隆哉を真ん中にして、前衛を翔太、後衛を勇一郎というふう陣形を取って戦っていたが、進むペースは先ほどとあまり変わっていないかった。

ところが、女の形をした悪霊たちは突然攻撃を止めた。しばらくその場に漂っていたが、突然向きを変え、山の頂上の方を指して

飛んで行ってしまった。

「なんなんだ…」

息を切らしながら勇一郎が言う。

「攻撃終わったのか？」

隆哉はなにも見えないので雰囲気で喋るしかなかった。

「俺達じゃなくて、もっと強い奴が来たみたいだな」

翔太が血相を変えて山を駆け上っていく。

「みちるがまずいみたいだな」

勇一郎も事態を察したのか、翔太に続く。

隆哉も気配こそはわからなかったが、ただ事ではないと感じた。

みちるはしばらく拘束されていたが、やがて頭の中に語りかけるように男の声が響いた。

「あなたが石の後継者なのか？」

（誰…誰なの、こんなことするのは！）

「失礼しました。こうでもしないとあなたとはゆっくりお話ができないと思ひまして」

男は淡々と語る。感情はあまり籠っていない。

（何が目的なの！？）

「私は…」

手が見ちるの後ろから伸びてきて、首から下げている石をつまむ。

「この石が欲しい」

突然現れた手にみちるはぎょっとする。さらに驚かせたのは手が真っ黒だったということだ。

（欲しいならあげるわよ！だからもうこんな目には遭いたくない！家族みんなで平穩に過ごさせて！）

「そうはいかないのですよ。なぜならこの石はあなた、つまりは正当な後継者でないと動かすことができませんから」

（私には何の力もないわ…この石で何が出来るっていうの…？）

「あなたは何もおばあ様から聞かされていないのですね…」

（おばあちゃんを知っているの…）

「あなたのことは全て知っている。凧野みちる」

（もうやめて！離して！）

「そうはいかない。わたしは全てを手に入れる。この世界も。そして君もね」

男はそう言うと、また新たに手が出てきて後ろからみちるの腰を両手で抱く。

（ちよつと、何を…！）

人の顔が出てきたのか、耳元に息づかいを感じてみちるは嫌悪感を抱いた。

「なんと無力なことか」

男はそう言うと、みちるの首筋をねつとりと舐め上げた。

（やめて…！！）

願いが通じたのか、男の動きが中断した。

「邪魔が入ったようですね」

翔太たちがやってきたのだと思い、視線を周りにやるとものすごいスピードで白い何かがちらを目がけてやってくる。みちるもさすがにびつくりして言葉が浮かばない。ぶつかる、と思った瞬間、みちるを拘束している手たちが白いものを弾く。弾かれたものをよく見ると美しい女の形をしたものがふわふわと浮いている。攻撃を受けたものの、どこ吹く風といった感じで涼しい顔をしていた。そしてまたみちるを拘束している手を目がけて何体も飛んでくる。みちるは本能で悟った。これはわたしを守るものたちだ、と。そして少しして翔太たちの声が聞こえてきた。

「みちるちゃん…！！！」

（翔太…！）

男たち3人は全速力で山を駆け上がってきた。

少し曲がりくねった先にはもうみちるがいて、激しい戦いが繰り広げられているのは見ずとも翔太にはわかっていた。しかし、みちるの姿を見るなり、翔太は固まってしまった。

「みちるちゃん……」

見るだけで、今までに出会ったことのない凶悪な何か、ということにはわかった。みちるは木をバツクに暗闇から伸びてきた手に絡め取られていた。それはまるで蜘蛛の巣にかかった蝶のようである。

遅れて勇一郎と隆哉もやってきた。

「うそだろ……」

勇一郎は見えるので、本当に信じられないといった感じた。

隆哉は見えないとはいえ、みちるの様子が明らかにおかしいので、事態の重さを感じ取る。

そして先ほど翔太たちを襲った白い女たちが今度は黒い手に向かって攻撃をしている。

「俺達も行くぞ！」

翔太はさすがに場慣れしているのか、切り替えが早い。翔太にリードされる形で勇一郎も戦闘に加わる。何も見えない隆哉は1人取り残された。

戦いは、小さな釘でジリジリとコンクリートの壁に穴を開けるような、そんな戦いだっただ。

女の霊が黒い手に攻撃をしかけ、弾かれる。その隙にもう一体が攻撃をしてダメージを与える。一筋縄ではいかない相手だ。

翔太もいつものようにお札で攻撃するが、さほど効いていないようだ。勇一郎も刀で切りかかり、うまくいけば相手の手を1本討ち取るのだが、大抵は他の手に弾かれては地面に叩きつけられていた。そんな様子をどうしていいかわからず隆哉は離れた場所から見ていた。

（どうしてだ……どうして俺だけなにも見えないんだ）

翔太が一瞬の間をみてみちるに近づくと弾かれて、地面にしこた

ま叩きつけられ、全身傷だらけだ。

(年下の翔太が頑張ってんのに…)

勇一郎は相手の懐に入ろうとして、敵から腹部に重い1発を喰らって咳き込んでいる。

(俺だつて同じ兄弟なのに…)

何度弾かれても叩きのめされても、翔太も勇一郎もそして女の霊でさえも立ち向かっていた。ただし何度も言うようだが霊は隆哉には見えていないのだが…

(みんなボコボコにされてんのに、なんで俺だけここにいるんだ！?)

そう、何も見えなくても感じなくても隆哉には見えているものはひとつ。大事な妹のみちるだけはちゃんと自分で見ることができる。

(もうわけわかんねえなら、みちるを元に戻すことだけ考えりゃいいんだ!)

隆哉は決心すると、みちるに向かって走り出した。

「お前ら道を開ける!!!」

翔太と勇一郎と自分には見えない何かへ向かって叫ぶ。翔太たちは突然叫んで現れた隆哉に驚いて、反射的に身をよけた。

「このやろっ!!!」

隆哉はそう叫ぶと、みちるに飛びついた。

(タカ兄!!!…ダメージを受けていない!?!?)

「なんだこれ?みちるが動かかねえぞ!くっそー!!!」

隆哉はやはり黒い手からの攻撃もものともせず弾いていた。先ほどの翔太たちが見たのと同じ光景がそこにはあった。

人間とは不思議なもので、大事なものを守りたいと本気で思ったときには想像以上の力が出るものなのだ。隆哉はみちるにしがみついて、木を支えにして踏ん張っていた。物理的には通常不可能な体制だろう。

「ぶざけんな!…くっ!」

顔を真っ赤にして尚もみちるを魔の手から引き剥がそうとする。

(タカ兄…頑張ってる…)

黒い手からの攻撃は続いているが、やはり隆哉には効かないようだ。みちるも少しでも兄の力になれるように身体に力を入れるがびくともしない。

「少々あなたの兄弟を見くびっていたようですね」

男がひさしぶりに口を開いた。声が聞こえたのか、翔太と勇一郎、そして女の霊も声の主を探すように辺りを見渡している。

「今日のところは私が引こう」

そう言つとみちるへの拘束が消え、隆哉はみちること地面へ落ちた。「痛つてえ！急に離すなばか！」

誰に言うでもなく、隆哉は叫んだ。

「みちるちゃん！」

「みちる！」

翔太と勇一郎も2人のもとへ駆け寄る。

「みんな…ありがとう…助かったわ」

みちるは少しくぐつたりはしつつも、怪我などはしていないようだ。

「それよりあの人は…」

みちるが4人より少し離れてたたずむ女の霊に視線をやる。

「あんた、誰だ？さっきは俺達を攻撃してきたが…」

勇一郎が立ち上がりつて女を睨む。まだ完全に敵意がなくなったとは感じていなかったからだ。

「お兄ちゃん、彼女は多分…」

みちるが言い終わる前に

「申し遅れました」

女はそう言つて真っ白だった姿から一転、鮮やかな羽衣を纏い、艶やかな黒髪を頭のでっぺんで結わえた姿に変わった。

「わたくしは、凧野家に代々仕える精霊でございます。先ほどの矢

礼をお許しくださいませ」

そう言つと腰を落とし、頭を下げた。

「じゃあ、お姉さんはみちるちゃんの家来つてこと？」

翔太が聞く。

「家来…そうですね、守護霊とでも言いましょうか。翔太様」
名前を呼ばれて翔太は驚いた。

「じゃあこの山を守っているということなのか」

「そうです。部外者が立ち入らないように監視するのがわたくしの仕事です、勇一郎様」

「みんなのことを知っているの？」

みちるが聞くと

「もちろんですよ、みちる様。わたくしはここであなたがたが生まれてから…ずっとずっとその前から風野家を見ていました」

「じゃあお姉さん…名前はなんていうの？」

「わたくしは『せつな』と申します」

「せつなさんは、みちるちゃんがピンチの時に現れて助けてくれるの？」

翔太が再度聞く。

「それは…残念ながらわたくしは持ち場を動くことができません。ところで…」

せつなはそう言つと、隆哉の前に立つ。

「隆哉様はわたくしが見えないのでしょうか？」

「ああ。それどころか、最初のあんたの攻撃すら弾いただろう。さつきだつて。あれは一体…」

隆哉は一体なにが起きているのかわからずきよるきよるしている。

「俺にも話を教えるよー」

せつなは全員を見渡すと微笑んで、

「少しお話をしましょうか」

そう言つた。

ちから

「少し話をしましょうか」

せつながそう言うと、ここではなんだからと、みちるが先ほど石の浄化を行った社まで案内された。

「ここは…俺達も入っていいのか？」

勇一郎がせつなに聞いた。

「大丈夫です。なぜならあなた方も選ばれた者ですから」

「それって、タカ兄も？何にも見えないのに??」

翔太が間髪入れずに聞く。

「そうですね。…このままでは隆哉様が不便でしょう。翔太様のお札を拝借できますか」

「うん」

翔太が一枚取り出し、せつなに渡す。せつなは受け取ったお札に念を込め、翔太に渡した。

「これを隆哉様の目の前にかざせば、わたくしの姿が見えるでしょう」

「兄ちゃん、見える？」

翔太は突然隆哉の目の前にお札をかざす。

「わあ！？人がいる??」

さすかの隆哉も驚いているようだ。

「隆哉様、初めまして。わたくしは風野家守護霊のせつなと申します」

「あ…どうも…」

今まで全く何も感じない生活をしてきたので、なんだか不思議な感覚を覚えた隆哉であった。目からお札を外したりかざしたりして遊んでいる。

「話がすすまんだらう」

そう言つて勇一郎が軽く隆哉の頭を叩いた。

「さて…ではこれでみなさまとお話ができるようになったことだし…何から話をしましょうか」

「せつなさん」

みちるが口を開く。

「なんでしょうか」

「私…お母さんやおばあちゃんみたいに『ちから』がないみたいで…私、正当な後継者じゃないんでしょうか」

不安そうにみちるは訴えた。せつなはそれを聞いてしばらく空を見つめて考えていたが

「いいえ、そんなことはないはずですよ。おそらく個人差でしょう。

ユリ様はもう5歳の頃にはわたくしとお話ができておりましたし、

飛鳥様は15歳で色々と見えてきたようですから…」

「やつぱはあちゃんすげえな」

隆哉は他人事のように呟いた。

「でも、もう2度もこんな事になっているのに、自分で何にもできないんじゃないか…」

「そのために勇一郎様をはじめ、ご兄弟がいるのですよ」

せつなは微笑んでみちるに答えた。

「じゃあ俺たちはみちるちゃんの護衛係ってこと!？」

「平たく言えばそういうことになります。そして、御3人方はそれぞれ能力をお持ちなのです。役割を知っていた上でこれからの戦いに備えて頂かないとなりません」

「最初に翔太が見えたりするようになった時は、俺は正直ありえないと思つてた。この化学が進んだ時代に」

勇一郎が口を開いた。

「兄ちゃんは特に現実の世界を生きる医者だもんな」

翔太が合いの手を入れる。

「無理もありません。この世界では何も見えない方が大半なのでから」

「でもタカ兄も見えないよ？」

「隆哉様はまた特別なのです」

「俺が!？」

自分を指差して目を丸くする。

「順番に話していきましょう。まずは勇一郎様ですが…この山に入ってから迷わずに山門までたどり着けましたね？」

「ああ…」

勇一郎はみちるの後姿が自分の目に映ったり消えたりしたのを思い出した。

「そうだ。兄ちゃんどうして？」

翔太も迷わずに進んだ兄の後姿を思い出す。

「あれは…最初は見間違いだと思っただが…みちるの歩く後姿が見えた」

「えっ…私が??」

「ただ、はつきりとじゃない。見えたり見えなかったりするんだ」

「それは、記憶投影…現代の言葉で言えばサイコメトリーとでも言いましょうか」

「なんだそりゃ？」

隆哉が思わず声を裏返した。

「物や人の記憶を読み取ることができるのです。草木に触れることによつて、みちる様の後姿が見えたのでしよう。今回はこのような場所なので読み取ることは容易でしたが、街中や人であれば数え切れない記憶があるので、最初のうちは知りたい記憶だけを読み取ることが難しいでしょう」

「じゃあ俺が攻撃できたのは…」

「勇一郎様の能力は手から波動を出すことによつて発動するものなのです。念じ方ひとつで武器にもなり得ます」

「じいさんの刀を使ったからというわけではないんだな」

「それは難しい質問ですね…」

せつなは少し困ったような顔をして笑った。

「もちろん、龍之介様のお力添えもあったかもしれません。しかし、そうなる…」

「おじいちゃんも何か能力のことで関係があつたんですか？」

考えているせつなにみちるが聞く。

「…このことはまた後で話します。次に隆哉様です」

「俺か」

「隆哉様は何もお感じにはならなかったでしょうが、全てのものを完璧に遮断してしまう能力なのです」

「それじゃあ気づかないわけだ」

合点がいったように翔太が頷く。

「じゃあ、さつき私を助けに来たときも…？」

「そうです。おそらく、隆哉様にはみちる様のお姿しか見えなかったのでは」

「まったくせつなさんの言うとおりだぜ。山門に入った時も、翔太に『危ない』って言われたけどなんのことやら…」

「そうです。まさに触れられない絶対領域なのです。しかし時にそれは諸刃の剣にもなり得ることを覚えておいてください」

「どういうことだ？」

「隆哉様の能力はあくまでも防御専門。攻撃はできません。そして今のように、わたくしと話ができるということは…」

せつなは突然隆哉の前に行く、肩に触れた。

「こちらの世界と繋がっているということです。つまり、隆哉様の絶対領域は使えないことになります」

「なるほどな」

隆哉は頷いた。せつなはまた微笑み元の位置に戻る。

「そして、お待たせしました。翔太様」

「俺はもうわかってるけど…」

「そうですね。この中で一番早く覚醒されていましたもんね」

「うん。やっぱり俺は攻撃専門？」

「はい。御三方の中では一番攻撃力に優れていると言えます。今までしてきたように、攻撃や封印が可能です」

「じゃあ俺がエースってわけか！」

「ニヤニヤしながら得意げに言う。」

「もう、調子に乗らないの」

みちるが恥ずかしそうに翔太を小突いた。

「翔太様は力のコントロールに関しては、もう何度も力を使っているから問題ありませんが、勇一郎様と隆哉様は鍛錬を積まれた方がよろしいかと思えます。いつまた先ほどの者が襲ってくるともわかりませんから」

「そうだな…」

「うん…」

「みちる様…」

「はい」

「そんな悲しい顔をしないでください。あなたの周りにはいつも味方がいるのですよ」

「ええ…でも、どうして浄化をしたのに…私はまた襲われたんですか？」

「それは…右手をご覧いただけますか」

「えっ」

みちるは夢の中で拾ってきた砂で負傷した右手の存在を忘れていた。

「これは…！」

以前よりもまた黒いシミが少しだけだが、広がった気がした。

「おそらくこの程度の浄化では消すことができないもの…わたくしの経験からすると強度の呪いですね」

「元を断つしかないのか」

勇一郎がみちるの手の平を見つめながら言った。

「現在考えられる手段は…残念ながらそれしかありません」

「でも誰がこんなことをしたのか見当はついてるのか？」

今度は隆哉が聞く。

「申し訳ございません。見当は全くといっていいほど…呪いをかけたのはおそらく先ほどの者でしょう」

「私、どうしたら…」

「焦ることはありません。今はまだその時がきていないのです。きつと来るべき時に、全てわかり、そしてみちる様の真の力も分かる 때가来ますから。どうぞご安心を」

せつなも気持ちわかるのだろう。力強くみちるを説得する。みちるも全て納得はいつていないようだが、せつなの目を見て頷いた。

「俺の能力が突然目覚めたのは…このためだったのか…」

勇一郎が誰に言うでもなく呟く。

「なにか強いきっかけと出来事があれば潜在能力は目覚めます…もちろん、みちる様もこれが第一歩だと考えてください」

「ええ、わかったわ」

先ほどよりはほぐれた感じでみちるは笑った。

「さあ、そろそろユリ様たちも心配されているでしょう。今から家の前まで転移でお送りいたしますので…」

「ちよつと待つて！」

翔太が反射的に叫ぶ。

「どうしました？」

「俺たち、まだじいちゃんの話聞いてないよ」

「龍之介様、ですか…翔太様はおじい様のごことはどのように聞いてますか？」

「じいちゃんは…ただ、母さんが小さいときに事故で死んだって…」

「事故、ですか…確かにある意味事故だったかもしれませぬ」

「どういう意味だ？」

勇一郎がすかさず質問した。

「それは…龍之介様はユリ様と飛鳥様を守ったのです。身を呈してしかし…龍之介様のご遺体はどこにも見つかりませんでした」

「なんだよそれ」

隆哉はまばたきするのも忘れていた。

「まだ、生きている可能性も…?」

みちるがおおすと聞く。

「それはわたくしには何とも言えません。ですが、勇一郎様のその刀…わずかですが、龍之介様の波動が感じられるのは事実です」

「じいさんは生きてるってことか」

「可能性としては考えられなくもありません。しかし、生きていたとしても…この世界での記憶が全くなっていることも考えられます」

「なんだかややこしくなってきたな。もう、ばあちゃんに聞くよ」

「なりません、翔太様!」

今までの穏やかなせつなからは想像もできないほど厳しい声が飛んだ。4人とも驚いてポカンとしている。

「…失礼しました。飛鳥様は覚えておいででないでしょうが、ユリ様は…まだそのことで後悔の念に駆られていらっしやいます。追い討ちをかけるようなことは決して…」

「わかったよ。ま、もしかしたらじいちゃんのことも、これから真実がわかるにつれて、何か調べられるかもしれないしね」

「お前、珍しく大人な発言だな…」

隆哉が普段とのあまりのギャップに驚いている。

「うるせえな!。俺は大人ですよー」

またいつものやり取りが始まって、みちるも勇一郎もほっとして自然と笑顔がこぼれた。

「では、お宅までお送りしましょう」

せつながいつもの笑顔に戻り、言った。

追っ影（前書き）

最近ペース上がってるな…。この調子でがんばりたいです。

追う影

朝日の柔らかい光がカーテンのすき間から差し込んで顔をわずかに照らす。

早朝の静けさがやけに耳について勇一郎は目を覚ました。手探りでいつもかけている眼鏡を探し当て、部屋の時計を見る。

「6時か…」

昨日のことが他人事のように思えてならない。ベッドに腰掛けてしばらく昨日のことを思い出した。

確かに自分は祖父の刀で得体の知れないものを切ったし、みちるも襲われていた。実際に自分は怪我だっただけ。怪我は飛鳥に治療をしてもらったので、傷は残らなかった。

そしてせつなとの出会い。

本当に、翔太が今まで見て聞いてきた世界はこの世に存在したのだ。

「あるはずないと思ってたのにな…」

風野家では一番現実的な性格の勇一郎だけに、昨日の出来事は事実であるのは理解してはいるが、なかなか素直に受け入れられないところもあった。

昨日は全てが終わって、せつなが家の前まで転移で送ってくれる時に、

「長男であるあなたがリーダーとなってみちる様を護ってください」そう託された。能力に目覚めたばかりの俺に出来るだろうか。めずらしく勇一郎は弱気になっていた。

みちるたち4人が裏山から無事に帰ってきた時は、父も母も祖母も自分たちが必ず戻ることを信じていたのだろう。感激して泣くこともなく、いつも通りに迎えてくれた。

せつなに言われた通り、祖父である龍之介の話は避けたが、せつな

に出会ったことを話すとユリはうれしそうに目を細めた。
それから順番にバタバタとお風呂へ入ると疲れたのか、4兄弟はす
ぐに寝入った。

みちるはいつも通りに身支度を整えると、母が朝食の準備をしてい
る食卓へ向かう。卵焼きを焼く甘くていい匂いがする。平日の朝食
は和食と決まっているのだ。

「おはよう」

みちるが台所に顔を出すと、飛鳥はいつも通り翔太のお弁当を作っ
ているところだった。

「おはよう。よく眠れた？」

「うん。昨日は本当に疲れたみたいだったから、一度も途中で目が
覚めなかったわ」

「そう、よかった」

「これ持っていくね」

そう言っ、みちるは綺麗に切って並べられた卵焼きを食卓へ持っ
ていく。朝食の準備をしているとみんな次々と食卓へ来た。

「おはよう」

まずは父と勇一郎がやってきた。父は新聞を小脇に抱え、勇一郎は
テレビを点けて朝のニュース番組で世間の動向をチェックしている。
「おはよう。みんな昨日はよく眠れたかい？」

ユリもやって来た。それぞれに挨拶をして、うんとかはあとか答え
ている。そうこうしている内に隆哉も寝ぼけ眼をこすりながら来る。
「おはようっす」

まだ疲れが抜けないのか大あくびをする。

「もう。今日は仕事ないの？」

みちるが呆れながら聞く。

「今日は休み……」

「いいなあ。私も休みだったらご飯のあともう一眠りするのにな」

「寝るときは本当にすぐ寝ただけだよ、興奮が冷めなかったのか
1度4時くらいに目が覚めて…なんだか寝た気がしないよ」

本当に半分寝ているような目をしながら隆哉が言った。

「さあご飯にしましょうか」

飛鳥がいつも通り全員分のご飯を持ってくる。

「あら、また翔太だけ起きてないのね」

「昨日はがんばったから…」

まだ寝かせてあげようという感じで口の前に人差し指を立てるが

「学校あるんだろう。起こしてくるよ」

勇一郎が容赦しないという雰囲気です席を立った。

「勇兄ちゃん…」

みちるが呼び止めると

「気持ちわかるが、あいつの本業は高校生だろ」

そう言つて廊下に出ると、ドタドタといういつもの音に反応が遅れたのか、翔太のおでこと勇一郎のあごが見事に衝突した。

「痛つてえ…！」

「っ！」

翔太は頭を抱えてしゃがみ込み、勇一郎はあごを押さえて声にならないようだった。

「ちよつと朝から…大丈夫？」

飛鳥が慌てて2人の元へ駆け寄る。

「痛いけど…大丈夫」

「起きるならさっさと起きて来いよ…」

2人とも若干涙目である。

いつものようにみちるは玄関を出る。翔太も慌てて靴を履いていた。

「ほら翔太。また遅刻しちゃうよ？」

「なんとか間に合うよ！最近また抜け道見つけたから、よし、いつ
てきまーす！」

いつてらっしやい、と奥から飛鳥の声が聞こえる。翔太は今日はみちるより先に走って行ってしまった。

「本当に間に合うんでしょうね…」

「みちる」

後ろから勇一郎に呼び止められた。この時間に出ることは珍しい。

「珍しいね。今日は手術あるの？」

「そうじゃないが…石、持ったのか」

「ちゃんとここに」

胸元から石を出してまた仕舞う。

「すぐには何も起きないかもしれないが…気をつけるよ」

「もちろんですよ。ありがとう」

「じゃあ…」

少々照れながらも、みちるのことが心配なのだろう。勇一郎はみちるとは逆方向へ歩いていった。

会社に着くと、在席表のあるホワイトボードに向かう。在席表を見れば、だいたい誰がいるのかわからないのかわかる。

みちるは自分の名前が書かれているマグネットを赤地から白地へひっくり返した。ふと氷室の名前を見ると、赤地のままだ。名前の隣には「休み」とだけ書いてあった。どうしたのかしら　と気にかけるながら自分の席へ戻った。

その時、社内がにわかになざわつく。ざわつきが気になってきよるきよるすると、山田が出勤してきたのだった。ほとんどの人は山田を疑惑の目で見ている。しかし、証拠は不十分ということで警察からは釈放されているのだ。みちるは同じ働く仲間として温かく迎えようと思った。

「おはようございます」

山田がみちるに挨拶をして自分の席に向かう。

「おはよう。今日からまたがんばろう」

「あ…はい」

山田の強張った顔もみちるのひとつことで少しほぐれたようだった。朝の最初の1時間ほどはざわざわとしていたものの、いつまでもそうしているわけにいけないので会社はまた元のように動き出す。

昼時になると、いつものようにみんな散り散りばらばらと昼食へ行く。みちるも今日はひとりだったので、どこか喫茶店で簡単にすませ、あとは本でも読もうと思っていた。社員用の通用口に繋がる階段を下りていると、前を山田が1人で階段を下りていた。

「山田君」

「…あ、風野さん」

みちるに呼ばれて、山田は振り向いた。昨日、給湯室でみちるを呼び止めたことをまだ気にしているのか、少し居心地が悪そうだった。

「今からお昼なの？」

「はい…」

「よかつたら一緒に行かない？」

「僕とですか？でも…」

「あ、ご迷惑だったかしら」

「いえ僕は全然迷惑じゃないです。むしろ僕と行くことで風野さんに迷惑がかかるんじゃない？」

「私のことなら気にしないで。じゃあ決まりね」

ニコッと微笑むと、みちるはあまり会社の人間が来ない店を選んで入ることにした。昨日は洋食だったから今日は和食にする。山田に聞くと、僕もそれで大丈夫です、とだけ答えた。

みちるは店員に頼んでなるべく入り口から見えにくい席にしてくれた。

料理は2人とも日替わりランチにした。注文を終えると山田が口を開いた。

「あの…」

「どうしたの？」

「すみませんでした」

「なにが??」

みちるは不思議そうな顔をする。

「昨日の事です。給湯室で風野さんを呼び止めてしまって」

「ああ。気にしないでいいのよ。…でも、『あいつ』って誰だったの?」

「それは…」

山田が答えようとすると、サラダが運ばれてきた。いつも料理で会話を遮られるとみちるは思う。

「私の勘違いだったら忘れて欲しいんだけど」

そう言ってみちるは自分の首から下げられている石をつまんで服の襟元から半分だけ出す。

「コレって、関係していたりする?」

ちよつと冗談で聞いてみたのだが、山田はみちるの石を見るなり目を見開き、唾を飲み込んだ。そして石とみちるの顔を交互に見た。

みちるは適当に言っただつもりだったが、山田の反応を見て、しまった、と思った。もしかしたら、山田君が敵? そう思い、慌てて石を仕舞う。

「…なんちゃって、意味わからないこと言っただけゴメンね!」

「あ、いえ…そういう日は氷室さん休みなんですわね」

「そうみたいね。どうしたんだろ?…後でメールでもしてみようかな」

不自然なくらい突然別の話題になった。今朝勇一郎に気をつけると心配されたばかりだったのに、気安く石を見せてしまったことにみちるは後悔した。それが例え相手が山田でも。

それからはなんだか気まずいような、微妙にお互いを警戒しているような、なんとも言えない雰囲気ですすんだ。ご飯の味なんて覚えていなかった。

それでもみちるはこれは自分の軽い気持ちを引き起こしたこともあるので、何も起こらないうちは山田を信じることにした。もしかしたら珍しくてそんな反応をしたのかもしれない…それは苦しい言い逃れだが、敵であればこんなにすぐそばにいるのだから…何もないわけではない。

今日は仕事がとんとん拍子に片付いた。複雑な案件もなかったし、今日は定時で帰ることにした。

ホワイトボードの自分の名前が書かれているマグネットを赤地にひっくり返すと、周りに挨拶をし、会社を出た。

今日もよく晴れている。家に帰る頃にはまた月が空へ昇ってくるのだろう。オレンジと紫がグラデーションになっている西の空を一瞥すると、みちるは地下へ潜った。

定期をかざして改札を抜け、更に地下へ潜るとタイミングよく地下鉄がやってくるアナウンスが響く。暗闇から勢いよく地下鉄が走ってくる。ちょうど帰宅時なので地下鉄に乗っている人も並ぶ人も、今日1日をこなしたとホッとした表情の人が多い。みちるもその中の1人だ。

自宅と会社の間は地下鉄で5駅。会社は地下鉄駅の割とすぐそばだが、自宅は駅から10分ほど歩く。

考え事をしていると、5駅なんてすぐに着いてしまう。しかし今日はいつも降りる駅で降りずに、1駅手前で降りた。たまに早く帰れるときはこうやって歩くのだ。

地下から地上へ上がると、空は先ほどよりも濃紺が広がっている。オレンジ色は西の空の隅に追いやられていた。1駅といつてもそこから家まで20分くらいの距離なので、大した距離ではない。そしてもうひとつ、みちるは好きな道がある。住宅街の路地で、車は進入できないほど狭い。昔ながらの石垣があったり5月頃になると

藤の花が咲く家もある。なんだか秘密の道という感じで自分では気に入っていた。今日もそこを通るために1駅手前で降りたのだ。

元々ひっそりとしている場所というのを加え、夕方にもなるとみんな夕食の準備に取り掛かるのだろ。人通りはいつも通り少ない。夕方の空気を吸い込みながら歩いていると、春先に相応しくない、纏わりつくような生ぬるい風がゆっくりと吹いた。その瞬間、みちるは直感的に危険を感じ取った。振り向いてはいけない。そう思い、大通りに出る道を急いで歩き出す。後ろからなにかが必死にはなく、余裕を持ってゆったりと追いかけてくる。その余裕を持ったところが余計にみちるを焦らせた。

「今日はなんか知らないうちに墓穴掘っちゃってるわね……」

2 度目

みちるは危機を感じていた。

後ろからなにか危険なものが自分に迫っている。もちろん、この道を歩くと決めたのは自分なのだから

非は自分にあるのだが…。

思い切って振り返ってしまおうかとも考えた。だけど、突然なにかされた時に対応できるほどの技術は残念ながら持ち合わせていない。

「なんだっていうのよ…！」

小さな声で悪態をつく。その時、排水溝の網に自分の靴のヒールがひっかかって派手にこけてしまった。

慌てて立ち上がろうとするも、腰が抜けたのか立ち上がれない。気配はすぐそこまで迫っていた。

もうだめだ。と思って目をぎゅっと閉じたその時、

「大丈夫？」

その声をかけられて拍子抜けした。恐るおそる顔を上げると、そこには氷室がいた。

「氷室さん…？」

「そこで見かけたから、声かけようと思ったんだけど。歩くのすごく速いから」

「じゃあ…私の後ろにいたのは、氷室さんだったんですか」

「うん。何度も呼んだんだけど…」

「すみません。考え事していて…」

そうみちるは言うとはっと安堵のため息を漏らした。氷室がいてくれなかったらどうなっていたんだろうと考える。

「派手にこけちゃったけど…ケガしてない？」

「え、あ…」

スカートをめくって自分の足を見てみると、こけた時に下になった左足のふくらはぎが地面にこすれたのだろう、じんわりと血が滲ん

でいた。

「ちよつと擦りむいただけです。ありがとうございます」

「そう。よかった」

そう言いながら氷室はみちるに手を差し出す。

「自分で、立てます…」

近くの金網につかまりながらみちるは立とうとするが、腰を抜かしてしまったのでうまく力が入らず、前のめりになった。

「あ…」

「ほら、だから言っただろ」

氷室が咄嗟にみちるの身体を支える形になる。

「すみませ…」

みちるが言いかけたところで、氷室がみちるを抱きしめた。しばらく2人の時間が止まる。

どれくらいそうしていたのか、どちらからともなく離れた。

「…ごめん。突然びっくりしたよね」

「あ、いや、びっくりはしましたけど…」

照れて氷室の顔を見ずにみちるは答えた。そして自分はまだ氷室の告白に返事をしていないことを思い出した。

「あの、」

「じゃあ、」

2人同時に口を開いたのでまたそこで会話が止まる。しばらく見つめ合ったが、どちらからともなく吹き出して笑った。

「なんか、おかしいですね」

「ごめん、笑わせるつもりじゃなかったんだけど…とりあえず人通りの多いところまで送って行くよ」

「ありがとうございます」

2人は並んで歩き出した。それを影から見つめる一対の目が光っていた。

みちるは結局家の近くまで氷室に送ってもらった。話が弾んだのだ。今日休みだったことを聞くと、付き合いの長い友人が入院したという事で、お見舞いに行っていたということだった。

家に帰り着くと、夕飯の香りが玄関まで漂っていた。

「ただいまあ」

「おかえりなさい」

母の飛鳥がちょうど食卓にいたのだろう、玄関までやってきた。

「今日はちよっと早かったのね」

「うん。仕事が順調に片付いたから」

「ご飯もうすぐできるからね」

「はい」

そう返事をして自室へ向かう。

「はあ」

なんとなくため息をついてカバンをベッドの上に置くと自分も足を床につけてベッドに横になった。

思いもよらぬ出来事に見舞われた日だったと、今日1日を振り返る。

「なんか…フクザツ…」

ぼそっとつぶやくと、ベッドから起きて着替えて食卓へと向かった。

風野家の血筋なのか、みちるもある程度のご飯を食べたり寝てしまうと、全く気にしなくなるタイプだ。

食事は相変わらず賑やかにテーブルを囲んだ夕食になったし、大好きなお風呂も入ってあとは寝るだけだった。

両親と祖母のユリに挨拶をして自室へ引き上げると、30分ほど本を読み、眠りについた。

ところが、途中でみちるは目を覚ました。眠りにはついたはずなのだが、どうも寝心地が悪い。堅い床の上で寝ていたようで、体中があちこち痛かった。めずらしくベッドから落ちたのだろうか。

身体を起こして目を凝らすと、そこは自分が寝ていた部屋ではなか

った。

「ここは…」

そう言ってみちるはすぐに気づいた。そこは以前に来た、あの冷たくて暗い建物の中だったのだ。

前回は大きな砂時計のある部屋で徐々に意識を失い、気づけば自分の部屋に勇一郎と翔太がいて、目の覚めないみちるを必死に起こしていた。

みちるは辺りを見渡すが、やはり相変わらず暗いのでこの全容を掴むことは難しい。

みちるが倒れていたのは今回は廊下の真ん中で、服はやはり黒のドレスを纏っている。石はしっかり首からぶら下がっていた。

「今度はどうやったたら元の部屋に帰れるのかしら…」

座ってしばらく考えたが、埒があかないのでとりあえず進むことにした。前回見た砂時計が気になったので、それを探すことにした。

裸足でしばらくひたひたと歩くと、向こうにぼんやりと青白い光が見えた。みちるの歩みが速まる。

青白い光はだんだんと大きくなってきた。しかし、今回は様子ごとくも違う。光の方へ駆け寄ってみると、前は下から見上げた砂時計を今度は上から見下ろす形となっていた。

「吹き抜けになっっているのね…」

建物の構造を見ながらみちるが独り言をつぶやいた。みちるのいる場所は2階になる。巨大な砂時計のためなのか、砂時計が鎮座している場所だけ余裕のある吹き抜けになっており、あとはまたそれぞれの方向に廊下がつながっているのか、暗い口がいくつかぽっかりと開いている。

よく見ると、自分の左手の方向に螺旋階段が見えた。そこを下りていくとおのずと砂時計へたどり着けそうだったので、みちるは下りてみることにした。

砂時計があるとはいえ、視界は悪いので慎重に下りる。ドレスの裾を引きずりながら砂時計へ近づいて行った。

砂時計はやはり見上げるほどあり、前に見たときとなんら様子に変化は感じられなかった。砂時計はやはり一番底に近いガラスが割れたままになっており、そこから砂が流れ出ていた様子がうかがえる。みちるは恐るおそる砂を触ってみる。砂は冷たくなかった。

よく見ると、流れ出た砂の中に手のひらほどの大きさのガラスが埋もれているのを見つけた。おそらく割れたガラスの破片なのだろう。みちるはガラスをそっと持つと、穴の開いたところへ合わせてみる。「大きさびつたりね」

そのままガラスをはめると、すっと吸い込まれるように周りのガラスと同化し、1枚のガラスとなった。

「……!!」

みちるが驚いていると、突然あたりに時計のようなカチカチという音が大きく響きだした。穴が塞がれたことで、時が動くのを思い出したのか、ザザーという音とともに砂時計が動き出し、視界がおせじにも良好と言えなかった建物の中が薄明るくなった。照明の色は建物の主の趣味なのか、全て薄紫に統一されている。

今まで虫一匹の気配すら感じなかったのに、今度はどこかに何か潜んでいるような、そんな雰囲気になった。

突然の出来事にみちるは動揺したが、今は自分しかないなので、冷静になって次のことを考えるしかなかった。

「そつだ、」

そう言いかけてみちるは砂時計の脇をすり抜け、扉の前に立つ。そこは前回みちるが倒れて元の自分の部屋で目を覚ました場所である。そこで何も起きなければ扉を開けよう、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7242/>

Dark Blood dream

2010年12月12日07時58分発行